Ⅲ　実習・教育

演習林は学生，生徒の『實地演習』の場として出発した。千葉演習林は１８９４／Ｍ２７年１１月２９日に発足したが，さっそく同年１２月末から翌年１月なかばまで，林学本科学生，乙科生徒の実地演習が行われた。『實地演習』は，東京山林学校以来の学科目で，この時代までは林学関係の多くの実習を含んでいた。林学本科のカリキュラムに，森林測量実習，造林学実習，森林道路実習が学科目名として登場するのは，翌１８９５年9月からのことである。その後，森林経理学実習など，さらに多くの実習科目が実地演習から分離していったが，『實地演習』の科目名は，旧制最後のカリキュラム改正で１９４８／Ｓ２３年に廃止されるまで残された。

千葉演習林における学生実習につき，１９１８年概要の『第五　學生々徒の演習』の項に，以下の記述がある（原文は縦書き）。

本林ニ於テ定期ニ行ハルル學生々徒ノ演習ハ造林學，森林測量學，測樹學，森林經理學及ビ地質學等ノ實習ニシテ其他臨時ニ學術ノ研究及ビ實習ヲ行ハシム

此等定期ノ演習ハ多ク春季夏季及ビ冬季ニ於ケル學業ノ休暇ヲ利用シテ行ハルルモノニシテ受持教官自ラ之ヲ實地ニ指導シ學生ヲシテ實際ノ技術ニ練熟セシメ且學科ト實地林業トノ應用的關係ヲ了得セシムルコトヲ目的トス

本林ハ學生ノ演習ニ適セシムベク多年經營ノ結果其模範的林分配置，見本林，試驗事業等學生ノ實習研究ニ適セル設備ヲナシ且學生宿泊ノ為メ清澄，郷臺畑，及ビ札郷ノ三箇所ニ各一棟ノ寄宿舎ヲ設ケタリ

以上の記述は１９２２年概要に，そのまま再録された。さらに１９３３年概要にも，実習科目に森林化学を追加しただけで再々録されている。

また１９４３年の五十周年概要には『四　學生の演習状況』として，つぎの記述がある。

本演習林は既往及び現在に於ても本學演習林中最も學生の演習に利用せらる。現在本學學生の實習に來演するは，林産製造，測樹，森林經理及び造林の各學科にして何れも少くとも一週間より二週間に亙りて滞在し實習を行ふものとす。尚ほ本學學生の

ほか或は他の大學，高等農林學校，中等學校の學生，生徒の實習或は視察見學等に來演するもの極めて多く，昭和十二年の如きは，本學及び其の他の學校よりの來演者を延べ人員に就いて見るに實に 二，六〇四人の多數に達せり。更にこの他山林關係の諸官廳及び各種團體の技術者にして視察のため來訪する者頗る多し。

以上が，古い時代の実習の大要である。しかし，個々の実習についての資料は少なく整理もされていない。ここでは，往復文書綴などに残された資料を集め整理して【Ⅲ－1　学生実習余聞】とした。なお実習での見学と関係が深く，一般からの視察の対象にもなった見本林，各種試験地などの消長を【Ⅲ－2　歩きから車利用の視察へ】に記述した。さらに，演習林が林学科に協力して進めた林業研修教育に関連して【Ⅲ－3　農科大学篤志林業夫→林業実地見習】と【Ⅲ－4　林業技術の普及】をまとめ，また，わが国の林学教育の祖といわれる松野先生の記念碑などについて【Ⅲ－5　外国樹種見本林入口の石碑由来】でふれた。

Ⅲ－1　学生実習余聞

大正年代なかば近くまで，本学林学科の現地実習のほとんどは，千演で行われた。創設期の造林，境界測量，経営案作成は，実習学生・生徒の労力によるところが大きい。現在も首都圏に接し教材に恵まれているため，他学部，他大学を含めての実習利用が多い。

（1）本学林学科の実習

林学の研究，教育を第一の目的として創設された演習林にとって，各学科目の現地実習の受け入れは，基本的に重要な仕事である。しかし，あまりに日常的で，かつイニシアチブが関係教室にあるためか，不充分な資料しか，千演には残されていない。

本学林学科の造林学現地実習は，演習林創設後は，ずっと千演で実行されてきた。しかし，毎年の実習の時期，期間，指導教官，実習生数など簡単なことさえ，断片的にしかわからない。往復文書と芳名録，公刊された記録，それに造林学教室に残されていた資料，関係教官のメモ，実習生の日誌，などを寄せ合わせて，さきごろ脱落だらけの造林学現地実習の変遷記録を公表した[5]。

それゆえ千演所在の資料だけで，各実習科目の記録を年表式にまとめることは困難である。ここでは，各時代にどんな実習が，どんなふうに，千演で行われたかの断片

を紹介する。

［明治期］

千葉演習林は，１８９４／M２７年１１月２９日，清澄官林約3百haで発足したが，それ以前に，乙科生徒による測量と森林設制学の現地実習が行われたようである[10]。また，発足間もない１８９４年１２月２６日から翌年１月なかばまで，志賀泰山講師，本多静六助教授，河合鈰太郎助教授の引率で，本科学生，乙科生徒が千演に滞在した[11]。 詳細不明であるが，現地検分をかねての総合的な実習であろう。

１８９５年春には，初めての造林学現地実習が行われ[1]，その後の数年間，本多と実習学生，生徒による見本林や，スギ造林地など造成の苦心が続く[2]。

造林学以外では，１９００／M３３年３月下旬から３週間にわたる，諸戸北郎助教授指導による森林測量実習の記録がある[3]。実習生は本科１年と実科２年で，各所に三角点を設定し測量を進めた。また平行して，本科２年生の森林道路実習があったという。この年１２月下旬から3 週間，本多と堀田正逸助手指導による実科２年生と，諸戸指導による実科３年生の実習が予定されているが[CM33/12/16]，内容はわからない。翌１９０１年３月には，本多と堀田指導の本科２年生と実科２年生の，諸戸指導の本科１年生の実習があり[CM34/03/07]，造林と森林測量と思われる。また４月上旬には，右田半四郎助教授指導による実科３年生の森林経理学実習が，猪ノ川方面で予定されていた[HM33/10/22]。なお同実習の開始は，郷台に建築中の掘建小屋の完成にあわせるよう，千演から本演へ連絡している[HM34/03/18]。

こうした学生，生徒の実習の結果，千演全体の地況，林況の概略が，１９０３／M３６年までには明らかとなった[ESS,K2]。第一次経営案『千葉縣下演習林経営方案』（１９０５年８月編成）の基礎資料になったと思われる。

その後も，造林，測量，経理実習についての断片的な記録がある。１９０８／M４１年春，実科３年生の森林経理学実習が右田半四郎教授の指導により行われた[CM41/03/17]。『東京大学百年史，部局史二，農学部』所載の写真，「明治４１年５月郷台畑寄宿舎庭前，浜尾大学総長，松井農科大学長の一行及び林学実科３年演習生」は，このときのもので，郷台寄宿舎は完成したばかりであった。

［大正期］

１９１７／T６年，千演での春季演習として，表１１の内容の予定表が残っている。造林（本科２年，実科２年），測樹・測量（本１），地質・測樹・経理（実３）と，入れ替わり立ち替わりの実習が予定されている。とくに実科３年生の実習は，連続１ヶ月間をこえるものであった。なお諸戸の測量実習は，この年，夏に延期されたようである[CT6/03/24]。１９１５[CT4/03/15,24,29]，１９１６[CT5/04/10,11]，１９１９の各年

CT8/03/15,04/09,28にも，似たような春季実習予定が往復文書綴に見られる。また，この時代１２月には，本科３年生の森林経理学実習が，右田の指導で２週間ほどの期間行われている CT4/12/01,CT5/12/05,08,12,HT6/12/13[H231],CT7/12/06,13, CT8/11/26。

表１１　大正六年春季千葉縣下演習林ニ於テ演習豫定＊

月日	科目	実習生［本科・実科，学年，(人数)］	教官	
3月２０日		本２(21名)，実２(37+留学生5名)	本多教授・宮下助手	出發
２１日	造林演習開始（本２，実２）			
３０日	造林演習終了	本２，実２		皈京
		本１(20名)	伊藤（門次）講師	出發
３１日	測樹演習開始（本１）		本多教授・宮下助手	皈京
4月　５日	測樹演習終了		諸戸教授	出發
６日	測量演習開始（本１）		伊藤（門次）講師	皈京
１１日	地質演習開始（実３）	実３(29+留学生3名)	脇水助教授	出發
	久留里泊；旅館山徳，１２日：折木沢泊；旅館織本屋，１３日：郷台寄宿舎泊，１４－１５日：鴨川泊；旅館吉田屋，相模屋，１６日：清澄寄宿舎泊			
１５日	測量演習終了			
１６日		本１	諸戸教授	皈京
１７日	地質演習終了		伊藤（武夫）講師	出發
１８日	測樹演習開始（実３）		脇水助教授	皈京
２５日	測樹演習終了		右田教授	出發
２６日	経理演習開始（実３）		伊藤（武夫）講師	皈京
5月１７日	経理演習終了			
１８日		実３	右田教授	皈京

＊原表は縦書き，原表の配列などを変更，字体は原文のまま

１９１７年１２月の森林経理学実習については，演習要領が残されているので，以下に全文をのせる（原文は縦書き，句読点を入れた)。

大正六年十二月林學三年級森林經理學演習要領

一．十二月十六日中ニ清澄寄宿舎ニ参着，直ニ到着届ヲ差出スコト。

一．同十七日午前，各組演習區域ヲ定メ，演習用器械ヲ貸付シ，次デ演習ニ關スル講義並ニ實地指導ヲナスコト。

一．同日午後，郷臺組ハ同寄宿ヘ移轉ノコト。途中，所員ノ案内ニ依リ演習區域ノ境界ヲ踏査スルコト。清澄組モ同様，演習區域ノ境界踏査ヲナスコト。

一．十七日中ニ演習區域ノ境界踏査ヲ了シ能ハザリシ組ハ，十八日モ引續キ之ヲ行フコト。境界踏査終了ノ組ハ，直ニ演習ニ従事スルコト。

一．演習ハ十二月二十八日迄ニ全部終了シ，翌二十九日帰京ノ途ニ就クコト。右出發ノ際，曩ニ貸附ヲ受ケタル器械ヲ返納シ，且出發ノ届出ヲナスコト。

一．演習中ハ雨天ニアラザル限リ，毎日午前八時迄ニ發足シ，午後三時乃至五時迄ニ帰舎スベキコト。

一．演習中各組ハ，毎日演習日誌ヲ認メ翌朝迄ニ提出スベキコト。右演習日誌ニ記載スベキ事項次ノ如シ。月日（曜），天氣，出發及帰舎時刻，演習ニ従事シタル場所，仕事ノ種類，功程，事故，感想，翌日ノ演習場所，仕事ノ種類，終リノ予定，演習日誌ハ組員輪番ニ之ヲ認メ，組，番號，執筆者ノ姓名ヲ記入シオクコト。

１９２０／Ｔ９年の春季演習予定表の内容を，表１２にしめす。測量（本１，実１）と理水及砂防工学（本２，実２）の実習予定地が『愛演』とある。前年，農科大学は農学部となり，カリキュラム改正があったが，この時代から従来千演で行われていた実習の一部が，他へ移り始める。ただし，表にある愛演は，現在の愛知演習林ではなく，愛知郡長久手町所在の県有林にあった演習地と思われる（東京帝國大學農學部附屬演習林例規1931版）。なお測樹（本１，実１，２），経理（実３）実習の指導は，担当教官のつごうで，千演の高嶋助教授，中島道郎助手，川内義左衛門助手が代理したようである[CT9/02/18]。

その後，造林，経理，測樹関係の実習につき，断片的な文書がみられるが，年間の実習状況を明確にする資料は見当たらない。

［昭和前半期，Ｓ３０年度まで］

昭和一桁の時代には，毎年，造林，経理，測樹関係の実習が行われた。このことは断片的な往復文書と芳名録から明らかであるが，本科・実科別，学年別の年間の実習日程を知る資料は残されていない。

１９３５／Ｓ１０年４月，農学部実科は独立して東京高等農林学校となる。以後の実習は本科のみとなる。

１９３５，３６，３７年度には，春に造林学，秋に測樹学と森林経理学の実習が行われた[CS13/?]。翌１９３８／Ｓ１３年度の林学科実習予定を表１３にしめす。この年から森林植物学実習が，猪熊泰三助教授の指導で始まった。

１９４１／Ｓ１６年４月，林学科は林業学専修と林産学専修の２専修となり，さらに選択科目の選び方で，林業学専修は生物系のイ，工学系のロ，社会科学系のハの３区分に，林産学専修は物理系のイ，化学系のロの２区分にわけられた。この改正前の１９４０年度，千演では測樹学実習，森林経理学実習，造林学実習，森林植物学実験，林産製造学実験の各現地実習が行われたようで，いずれも必修であった。改正後も，これらの現地実習の多くは千葉演習林で続けられたが，測樹学実習のみが両専修をつ

表１２　大正九年春季演習日程＊

月日	科目	実習生［本科・実科，学年，(人数)］	教官	
2月１７日		実３（38名）	堀田助教授	發千演着
１８日	測樹演習開始（千演，実３）			
２３日	測樹演習終了（千演，実３）		佐藤（彌太郎）講師	發千演着
２４日	経理演習開始（千演，実３）		堀田助教授	帰京
3月　１日		本１（9名），実１	諸戸教授・伊藤講師・青沼助手	發
２日				愛演着
３日	測量演習開始（愛演，本１，実１）			
６日	経理演習終了（千演，実３）			
７日		実３		帰京
８日		実２		發千演着
９日	測樹演習開始（千演，実２）			
１１日	測量演習終了（愛演，本１，実１）			
１２日		本１・実１	諸戸・伊藤・青沼	發
１３日				帰京
１４日	測樹演習終了（千演，実２）　本１，実１		堀田助教授	發千演着
		本２（12名）	右田教授・山田助手	發千演着
１５日	測樹演習開始（千演，本１，実１，堀田）			
	経理演習開始（千演，本２，実２，右田・佐藤）			
２０日	測樹演習終了（千演，本１，実１）		本多教授・土井講師・宮下助手	發千演着
２１日	造林演習開始（千演，本１，実１）		堀田助教授	帰京
２４日	経理演習終了（千演，本２，実２）			
２５日	造林演習開始（千演，本２，実２）		右田・佐藤・山田	帰京
３０日	造林演習終了（千演，本１，２，実１，２）			
３１日		本１，２，実１，２	本多・土井・宮下	帰京
4月　１日		本２，実２	諸戸・伊藤・青沼	發
２日				愛演着
３日	理水及砂防工學演習開始（愛演，本２，実２）			
１０日	理水及砂防工學演習終了（愛演，本２，実２）			
１１日		本２，実２	諸戸・伊藤・青沼	發
１２日				帰京

＊原表は縦書き，原表の配列などを変更，字体は原文のまま

うじての必修科目で，森林経理学実習と造林学実習は林業学専修のみの必修科目となった。なお，従来の森林植物学実験の一部を含む樹木学実験が新設され，林業学専修イ，ロの選択，林産学専修の必修科目であった。また林産学製造実験の製炭実習は，林業学専修イの選択，林産学専修の必修科目となった。

表１３　昭和十三年度林學科實習期日豫定（▲千演）*

實習種別	學級	期日	期間
林學一般實地見學	２年	７月　１日　－　７月１２日	12日
測量學	１年	７月　１日　－　７月１４日	14日
▲森林植物學	１年	５月中１日，６月中１日， ８月２６日　－　８月３１日 ▲９月　７日　－　９月１０日	12日
地質學	１年	９月　４日　－　９月　７日	4日
森林土木學	２年	９月　１日　－　９月１０日	10日
▲森林經理學	２年	１０月　５日　－１０月１７日	13日
森林理水及砂防工學	２年	１０月３１日　－１１月１５日	16日
▲測樹學	１年	１１月　１日　－１１月　７日	7日
林産製造學	２年	１１月２５日　－１１月２７日	3日
▲造林學	１年	３月１５日　－　３月２４日	10日

*原表は縦書き，原表の配列などを変更，字体は原文のまま

なお製炭実習の内容は，下記の１９４１年７月実施予定の日程に明らかである CS16/06/27。

製炭實習日程（原文は縦書き）

七月五日：竈底徑始（ﾖｳﾃｲｹｲｼ,設計図により竈底の形をきめる），竈底ノ整備，排水管設置，竈口・竈壁・排煙口・煙道等ノ構築

七月六日：炭材及燃材ノ伐採調材，全炭材及燃材秤量，單材試験用炭材ノ調整，炭材詰込作業

七月七日：天井構築，口焚乾燥

七月八日：着火

七月九日－十一日：炭化，精煉

七月十二日：消火

七月十三日：出炭，秤量，収炭率・單材試験計算

七月十四日：皈京（隨時）

その後１９４４／Ｓ１９年４月のカリキュラム改正で，測樹学実習は林産学専修から除かれ，また林産製造学実験は林業学専修イの選択科目から除かれた。さらに１９４８／Ｓ２３年には，林業学専修のイ，ロ，ハ，林産学専修のイ，ロの選択科目区分を廃止し，それにともなうカリキュラム改正で，造林学実習は造林学実験と改称，また林産学専修の必修科目として林業学実習が新設された。林業学実習の内容は，樹木，測樹，造林で，千演で行われた。

１９５１／Ｓ２６年４月，新制大学としての林学科カリキュラムが編成された。表１４は，新制度になって間もない１９５３年度の林学科実習予定である。千演では林業学専修を対象に，測樹学，造林学，森林経理学の実習が行われた。また林産学専修を対象に，林業学汎論（林業学綜合）実習が行われたが，これは前記の林業学実習にかわるもので，従来の樹木，測樹，造林のほかに測量がくわわった。

表１４　昭和２８年度林學科実習予定（業：林業學專修，産：林産學專修）*

學科目	學年	時期　月／日	日数	場所	指導教官	同左補助
樹木學	業３	4-10月，随時	3	適宜	倉田助教授	島地　謙
		6/29- 7/ 5	7	秩演及隣接地		
森林動物學	業３	4-10月，随時	3	適宜	日塔助教授	立花　觀二
測量學	業３	10/24-11/ 2	10	愛演	荻原　教授	野口　陽一
測樹學	業３	12/21-12/26	6	千演	嶺　助教授	平田　種男
林業學綜合	産３	10/24-11/ 3	11	千演	倉田助教授	佐々木敏雄
					扇田助教授	堀田　雄次
					嶺　助教授	平田　種男
					中村　教授	佐藤清左衛門
造林學	業４	4/ 8- 4/13	6	千演	中村　教授	郷　正士
砂防工學	業４	12/21-12/27	7	愛演及隣接地	荻原　教授	野口　陽一
森林土木學	業４	9/ 1- 9/ 7	7	秩演	加藤助教授	丸山　正和
森林経理學	業４	6/28- 7/ 8	11	千演	吉田　教授	平田　種男
林産學綜合	産４	7/ 1- 7/ 5	5	名古屋及隣接地	芝本　教授	遠藤　健治郎
林學綜合	業産	10/26-11/ 1	7	未定	藤林　教授	丸山　正和

* 原表は縦書き，原表の配列などを変更，字体は原文のまま

［昭和後半期，Ｓ３１年度から］

１９５６／Ｓ３１年４月，林産学科独立。林業学汎論実習は林学実習に名称を変更，内容は従来どおりで千演で行われ，林学科の関係教官が引率指導した。しかし，１９６４年からは実習期間が従来の半分の３～４日間に短縮され，引率指導は林産学科教官，実地指導は千演の教職員が行うようになった。

林学科関係の実習は，従来からの造林学，測樹学，森林経理学のほかに，樹木学，森林動物学の現地実習が，ほぼ恒常的に千演で行われるようになった。林学科では１９７０／Ｓ４５年以来の数次のカリキュラム改正の結果，それまで必修であった実習，実験科目が，すべて選択必修科目となった。

昭和後半期は最近のことであり，毎年の実習予定表も比較的多く保存されている。表１５は１９８７／Ｓ６２年度の林学科実習予定である（昭和年代最後の１９８８年度は，一部講義の学年変更で変則なため前年度をしめす）。千演での実習のうち，造林学，森林動物学，樹木学の３科目は５月の連休明けに連続して行われるようになった。

表１５　昭和６２学年度　学生実習計画　一覧表　林学科

学年	科目	期間	日数	指導教官	実施場所
3	造林学実験	5/ 6- 5/11	6	佐々木・斯波	千葉演習林
3	森林動物学実験	5/11- 5/12	2	古田・宮下	千葉演習林
3	樹木学実験	5/13- 5/14	2	濱谷・梶	千葉演習林
4	森林経理学実習	5/12- 5/16	5	南雲・山本	千葉演習林
3	樹木学実験	7/11- 7/14	4	濱谷・梶	秩父演習林
3	森林土壌学実験	7/15- 7/17	3	八木・松本	秩父演習林
3	森林土木学実習	7/18- 7/22	5	小林・仁多見	秩父演習林
4	森林利用学実習	7/23- 7/25	3	南方・仁多見	秩父演習林
4	森林風景計画実習	6/ 1- 6/ 3	3	篠原・堀	富士演習林ほか
3	森林総合実習	8/23- 8/29	7	福島　ほか	北海道演習林ほか
3	測量学実習	10/12-10/17	6	西尾・芝野	愛知演習林
3	測樹学実習	12/14-12/18	5	箕輪・山本	千葉演習林
3	砂防工学実習	3/ 1- 3/ 5	5	西尾・川辺	長野県下（予定）

（２）宿舎，宿泊費，食費

［明治期］

１８９９／Ｍ３２年３月，清澄派出所構内に平家建庁舎が完成，同年１２月（学生）寄宿舎が完成（平家建，39.75 坪，茅葺，Ｔ２解体し札郷へ移築）（図２）それまでの清澄周辺での実習には，清澄部落所在の旅館（旅人宿）が，もっぱら利用された。

旅館は小梅屋，山口屋（のちの清澄館），橘屋の３軒があったが，橘屋は小さく，前二軒の利用が多かった。寄宿舎ができても，収容人数が25名程度だったので，その後も旅館の利用が続く。

教官もこの時期，つごうにより庁舎，寄宿舎または，旅館に宿泊した。１９０３／Ｍ３６年，二階建新庁舎が完成，旧庁舎はのちに教官宿舎の通称で，昭和四十年代まで教官の宿泊に利用される。寄宿舎が完成して間もない１８９９年末，清澄演習林派出所から演習林本部，林学本部にあてた下記連絡文書が残されている（原文は縦書き，句読点を入れた）[HM32/12/10]。

左之件々可然御取計相成度候也。

第一．演習ノ件

一．演習生徒ノ氏名，員数，宿舎割，御通告相成度事。但，目下寄宿ノ畳数ハ，八畳，拾畳，拾畳，拾畳，六畳，合計四拾四畳ニ御坐候。

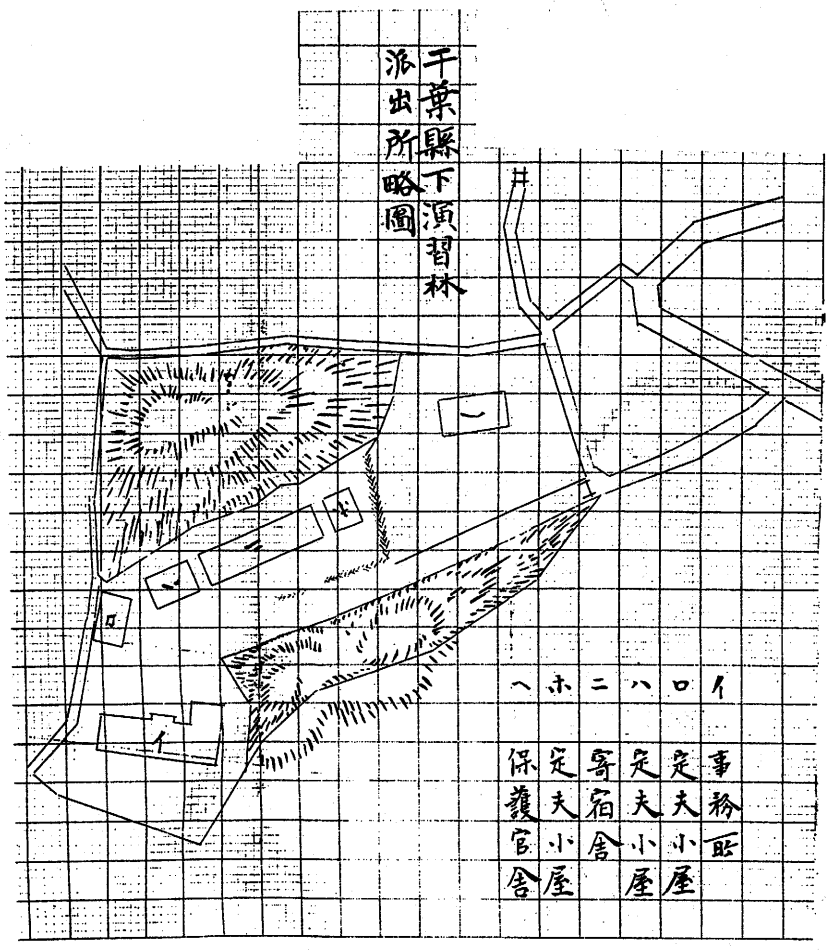

図2　清澄派出所構内略図（1900／M33年）HM34／01／29

一．旅宿ノ生徒ハ其人名，旅店名共，御通告無キ場合ニハ．当方ニテ見計ラヒ取極メ可申ニ付，後日苦情申立テ無様，御話合相成度事。

一．賄料ハ昨年位ニテ話シ置ク見込ニ御坐候。

第二．林産物製造ノ件　（略）

第三．演習器具之件

一．測竿不足ニ付，御入用丈ケ御対策相成様，経理学教室へ御話相成度事。

一．清澄道路崩壊ノ個所有之，今日ニテハ車両全通難致個所モ有之候間，御急ギノ

品ハ其積ニテ早ク御送出相成様致度。

明治三十二年十二月十日

１９００／Ｍ３３年１２月下旬から翌年にかけての実科実習については，千演山村書記から本演への，以下の内容の文書が残されている[CM33/12/16]。

実科３年生：諸戸助教授指導，15名，３週間。15名寄宿舎泊，食費26銭／日／人(小梅屋請負，朝；味噌汁，漬物，昼；海苔巻弁当，夜；味噌汁，肴)。食費はＭ３２年１２月の20銭がＭ３３年春の24銭と値上がりしている。値引きは，きてからの交渉しだいと思われる。

実科２年生：本多教授，堀田助手指導，35名，３週間。分宿；小梅屋15名，山口屋10名，橘屋10名，食費泊とも39銭／日／人。値段はかけひきしだいだが，30銭以上が良いと思う。茶代は各自の自由。

翌１９０１年春の造林学実習では，本科２年生10名は寄宿舎，実科２年生37名は旅館に宿泊，一部日程が重なる測量学実習の本科１年生11名は寄宿舎に宿泊となっている[CM34/03/07]。

１９０９／Ｍ４２年春の造林学実習も同様で，本科生25名は寄宿舎，実科生40名は旅館となっている[CM42/03/08]。同年から翌年冬にかけ，測量学実習が集中的に行われ，藤岡光長講師指導の本科１年生29名（12月/18日-12/29）は寄宿舎，松村繁朶助手指導の実科３年生40名(12/12-12/29) は旅館，実科２年生39名(12/29-1/9) は寄宿舎泊を予定している[CM42/11/26]。

１９１１／Ｍ４４年１２月の実習では，本科１年生38名 (12/18-12/29)を寄宿舎，実科２年生は17名ずつ２回 (12/14-12/22,12/22-12/30)にわけ旅館泊としている[CM44/12/08]。なお，本科生全部の収容が無理なときは，一部を旅館へとなっている。

この時代，多くの実習は清澄泊で行われたが，森林経理学などの一部実習は郷台，札郷の建物も利用した[HM36/06/18]。１９０１／Ｍ３４年４月郷台で，右田助教授指導による実科生徒の実習予定があった[HM34/03/18]。この時期に別記（Ｉ－４）の物置小屋を新築[HM33/10/22[ナシ]]，既存建物での宿泊が可能になったと思われる。現在の郷台寄宿舎は１９０８／Ｍ４１年３月完成，同年４月１０日ごろから宿泊利用が可能になった[CM41/03/19]。前記のように，実科３年の実習生と濱尾総長一行の写真は，この時期に撮影されたものである。

なお札郷でも１９０１年，30坪余の小屋を建てた記録があるが，実習での利用状況などの詳細は不明である。

［大正期］

１９１３／Ｔ２年１２月，清澄新寄宿舎完成（二階建，90.75 坪，ほかに玄関 3.0，賄室・便所・廊下11.5，浴室・便所・廊下 8.5坪)。同年５月，鴨川の業者が 2,944円で落札，７月に着工したという[CT2/05/16]。清澄の旧寄宿舎は解体し札郷へ，１９１４年３月移築完了。これで，清澄，郷台，札郷に，いちおうの宿泊施設が整った。しかし，清澄で実習が重なる場合は，旅館も利用された。清澄寄宿舎では，旅館請け負いによる賄いが続いた。

この時代も森林経理学実習は各寄宿舎に分宿実施されることが多かった。１９１６／Ｔ５年１２月の本科実習は，清澄12，郷台10，札郷10名の分宿であった[CT5/12/05,12]。１９１８年は本科生が14名と少なかったせいか清澄のみを予定したが[CT7/12/06,13]，スペイン風邪の流行で，実施は１２月から翌年１月に延期された。１９１９年４月３０日からの実科３年生の実習については[CT8/04/28]

4/29「ﾌﾞﾝｼｭｸ　ﾓﾖｳ　ｷｷﾀｼ」　[千演→経理学教室服部助手]

4/29「ﾆﾋｮﾘ　ｶｸｷｼｸ　12ﾒｲﾂﾞﾂ」　［経理学教室服部助手→千演］

の電文があり，当初清澄に全員集合，５月２日から各寄宿舎へ分散したと思われる。

１９２２／Ｔ１１年には，学年暦の開始時期が従来の９月から４月になった影響で，秋に集中しての森林経理学と測樹学の実習が計画されていた。ところが，地元にコレラの発生があり，千演では延期を希望[CT11/10/03]，その結果１１月３０日～１２月２８日の期間に逐次実施となった。実習生は，本科１年生22名，本科２年生13名，実科１年生43名＋聴講生 3名，実科２年生43名＋聴講生 3名で[CT11/11/18]，このうち実科１，２年生は日程の一部が重なり，92名の多数なので旅館の利用が必要と思われた[CT11/11/20]。しかし，実科２年生（森林経理学）は，札郷２組（12名)，郷台３組(18名)，清澄２組（12名)，実科１年生（測樹学）は，清澄６組(45 名）とし，日程の重なる１２月１７日～２１日の期間は，57名が清澄寄宿舎に宿泊したようである[CT11/11/22]。１９２３年にも同様の実習が予定され[CT12/11/15]，本科１年生27名，本科２年生11名，実科１年生40名，実科２年生40名は寄宿舎だけの利用でたりたもようである。

多くの実習は，本科と実科を別々にして行った。しかし，本多による造林学実習だけは，ずっと本科・実科合同であった。のちに林学第二（造林学）講座担任教授となる中村賢太郎のメモ（以下Ｎメモと表示）に以下の記述がある。

１９２３／Ｔ１２年春の造林学実習には，本科１年生13名，実科１年生44名が参加。宿舎割は，本科が清澄寄宿舎の二階南側十畳２室と八畳１室，実科の28人が同北側十畳４室と南側八畳１室，実科16人が清澄館八畳 4室。宿泊費は，寄宿舎が85銭，旅館

が 1円15銭／日／人で，旅館泊には演習林が10銭／日／人を補助した。翌１９２４年春は，本科１年生23名は清澄寄宿舎，実科１年生32名は清澄館で宿泊費は寄宿舎85銭，旅館95銭，なお教官室1円15銭ぐらい，とある。

［昭和前半期，Ｓ３０年度まで］

１９２７／Ｓ２年度の各寄宿舎の状況は，表１６のようであった[CS4/04/06[C7]]。

表１６　各寄宿舎収容能力（１９２７）

場所	部屋×数	人／室	収容人数（　）*
清澄	10畳×６	6	
	8畳×２	4	44　(42 - 50)
郷台	10畳×５	6	30　(30 - 35)
札郷	10畳×４	6	
	5畳×１	3	27　(27 - 32)

*（適度－最大限度収容人数）

同１９２７年度の実習利用は，清澄寄宿舎だけであって，表１７のように，延 156 人，1,264 日の利用があり，総額25円28銭の舎費(２銭／日／人）の納入があった。

これに対する同期間の寄宿舎関係支出は，総額 351円01銭で，内訳は木炭，薪 129 円65銭，石油（ランプ用）42円90銭，ランプなど照明関係用品26円18銭，据風呂桶85円，炊事関係用品（食器とも）15円75銭，清掃関係用品10円98銭，その他40円55銭となっている。

表１７　舎費納入状況（１９２７）

年／月	人数×日数	納入舎費
1927/04	34× 8+ 1× 9	5円62銭
/11	33×12+ 2×16	8円56銭
1928/01	43× 6+ 1× 5	5円26銭
/03	40× 7+ 2× 6	5円84銭

賄いは，食器その他の器具を貸与しての旅館の請け負いで，90銭／日／人であった。実習など多人数の場合は，旅館から出張してきて賄いをしたが，少人数の場合は食事を届けてもらうか，食べに行くかした。また旅館泊は１円20銭／日／人で，長期滞在の割り引きはなかった[CS5/06/24[C69]]。

この時代から造林学実習も，本科と実科を別の時期に分けて行うようになった。実習生の旅館宿泊は，特別な場合に限られ，１９３５年実科が独立してからはなくなった。

つぎにＮ（中村賢太郎）メモによって，賄いが請け負いから直営となるまでの，造林学実習での宿泊費の変遷を表１８にまとめた。

表１８　清澄寄宿舎の宿泊費変遷

年／月	賄い	食費＋舎費[イ]	備考
1930/11	清澄館	90銭＋2銭	実科
1931/03	清澄館	80銭＋2銭	本科
04	小梅屋	80銭＋2銭	実科
1932/03	小梅屋	80銭＋2銭	本科[ロ]
04	清澄館	70銭＋2銭	実科
1933/03	清澄館	70銭＋2銭	本科
04	小梅屋	70銭＋2銭	実科[ハ]
1934/03	小梅屋	70銭＋2銭	本科
04	清澄館	70銭＋2銭	実科[ハ]
1935/03	清澄館	70銭＋2銭	本科[ニ]
1936/03	小梅屋	70銭＋2銭	[ホ]
1937/03	直　営	80銭	[ヘ]
1938/03	直　営	78銭＋2銭	[チ]

[イ]日・３食／人，[ロ]食費問題起こるとある，[ハ]教官室 1円30銭，[ニ]実科独立，[ホ]弁当箱使用，[ヘ]直営の賄いは料理人で失敗とある，[ト]教官室１円（値下げ），[チ]教官室，小使賄い

長年月にわたり続けられた賄い請け負いが，直営に切り替えられた事情を知る資料は見当たらない。以後，賄いの直営は続き，現在にいたる。

戦争の影響で１９４１年３月には，賄いの直営，物資不足にて困窮（米，砂糖，豚肉，鶏卵品不足）とＮメモにある。１９４３年からは実習学生に，主食（米）の持参が義務づけられ，その量は 3合，2.5 合，または 2.3 合／日／人と，実習科目や配給量の変化などで，まちまちであった。

１９４４／Ｓ１９年末，林学科主任吉田正男（演習林長兼務）から千演あての，学生実習についての連絡文書には「追テ學生ニハ，所定ノ配給米（一日二合三勺宛）ヲ携行セシムベキモ，加給食ノ給與ニツキ事情ノ許ス限リ，格別ノ御考慮相煩度悃望候」とある[CS19/11/20[H222]]。米の配給通帳制は１９４１年４月から始まったが，たちまち寄宿舎の賄いが窮屈になった。そこで，まず三浦演習林長（林学科主任兼務）から，ついで高原千演主任から千葉県経済部長あて『飯米配給申請』が出された[CS16/08/11[C134]]。申請の内容は，近隣の来泊者には飯米の持参，清澄では旅館の利用（旅館には業務用米の配給があった）を励行している。しかし，外地など遠隔地からの来演者は飯米持参が困難，また郷台，札郷では近くに旅館がないので，月間30人分の飯米の特配を希望するものであった。申請は受理され，亀山村から配給を受けた[CS16/08/29]。この時代には寄宿舎用として，まだ砂糖の配給があり[CS16/08/15]，学生実習でも，そのつど飯米の特配を受けていた[CS16/12/?[C254],17/03/04[C314]]。

同１９４１年７月の製炭実習（前項に日程記載）での献立予定を，表１９にしめす。副食は魚などの海産物が多い。同年９月，東京高農の森林経理学実習が清澄は清澄館，札郷は織本旅館の賄い請け負い（生徒 1円90銭，教官 2円50銭）で計画されたが，清澄館は飯米調達不能であった[CS16/09/13,30]。

表１９　製炭實習賄献立表（１９４１年７月）

月／日	朝	晝	夜
7／4			煮魚，焼魚，汁，漬物
5	玉子，ノリ，汁，漬物	弁当箱	塩焼，カボチャ丼，汁，漬物
6	ノリ，ジャガイモ，汁，漬物	ノリマキ	刺身，汁，漬物
7	玉子，ヒジキ丼，汁，漬物	ノリマキ	ウドン，煮魚，汁，漬物
8	ノリ，焼豆腐，汁，漬物	弁当箱	煮魚，焼魚，汁，漬物
9	玉子，ノリ，汁，漬物	ノリマキ	テリ焼，酢ノ物，汁，漬物
１０	ネギ玉子トジ，漬物	ノリマキ	塩焼，ジャガイモ丼，汁，漬物
１１	玉子，カボチャ丼，汁，漬物	弁当箱	ウドン，漬物
１２	玉子，ノリ，汁，漬物	ノリマキ	刺身，汁，漬物
１３	ヒジキ，佃煮，汁，漬物	弁当箱	煮魚，塩焼，汁，漬物
１４	玉子，ノリ，汁，漬物	ノリマキ	

但シ不漁ノ時，品不足ノ場合，献立ノ一部ヲ変更致シマスカラ豫メ御承知ヲ願ヒマス

（原表は縦書き）

１９４２年夏以降は食糧事情の逼迫で，実習用米配給申請は，県から却下されるようになる[CS17/07/27[C96]]。こうして１９４３年の実習からは，米持参となる。しかし同年春には，演習林産玄米の供出と引き換えに飯米95kgの配給を受けた[CS18/02/01,02/19,03/16]。また同年７月の林産学専修の林産製造学実習（製炭）では，配給申請が一度は却下されるが[CS18/07/05]，同実習には夜間作業もあり，持参の配給米だけでは不足との理由で再度申請[CS18/07/15]，今回限りとの条件付きで，実習学生12名，期間12日間に対し3斗6升の特配米を受けている。

敗戦直前には賄い用の塩さえも不足し，製炭窯余熱利用の製塩許可を，東京地方専売局館山出張所に申請している[CS19/03/09]。このような実習時の食糧確保のため，演習林職員は直接の農作物生産のほか，いわゆるヤミ食糧の入手手配にも努力したが，それは敗戦後もかなりの期間続いた。

戦時中から敗戦後の宿泊費は，インフレで急上昇する。Ｎメモによれば，１９４３年３月，１円／日／人＋舎費2 銭／日／人を徴収（実費２円20銭位）とあり，差額は演習林が補助したのであろうか。１９４７年３月7 円，同年１０月30円，１９４８年３月30円，１９４９年３月50円で，いずれも米持参である。舎費としての徴収はなくなった。

その後，宿泊費は80円となり，１９５３年度には 100円に値上げの予定であったが，学生の要望で延期[CS28/06/19[H179]]，１９５５年ごろ 100円になった[CS30/06/21]。造林学実習の配布資料によると，１９５８年４月の実習まで主食の携行を学生に指示している。しかし１９５５年秋には，学校の食堂等でも正式に業務用米穀の売り渡しを受けられるようになる。このころから現金支払いで主食の現地調達を希望する学生が多くなった。

［昭和後半期，Ｓ３１年度から］

敗戦後のインフレは一段落したが，日本経済の高度成長下，宿泊費の上昇は続いた。宿泊費（日／人）は，１９５９年 100円（米持参）または 200円（米持参なし）であったが，以後米持参なしで，１９６３年 250円，１９６７年 330円，１９６９年 400円，１９７３年 500円，１９７４年 600円，１９７６年 700円との記録があり，１９７７年～７８年 800円，１９７９年～８７年1000円，１９８８年からは1200円である。

１９７３／Ｓ４８年１２月制定の，千葉演習林宿泊施設使用規程では，学内者，学外者，教職員，学生をとわず，宿泊費（食費）は一律とし，現在にいたる。それまでは，たとえば１９５９年には，東大関係：学生 100円，教職員 350円，学外：学生 200円，教職員 400 円（ただし東大学生は米持参）と差があった[CS34/06/22]。

１９７８年１１月清澄寄宿舎取り壊し，翌年ＲＣ２階建，延586.44m² (177.4 坪）の新（寄）宿舎完成，１９８０年使用可能となる。各部屋の広さ等の内部設計は，利用者の意見を参考に種々変更された。二段ベットになり，明治以来？の大学マーク入り布団は処分された。１９８７／Ｓ６２年度から宿舎使用料（かつての舎費に相当？）の徴収が始まる。使用料は清澄 500円，札郷 100円，郷台 100 円／泊／人で，冬期はいずれも暖房費50円が加算される。使用料は，国立大学学生がカリキュラムにもとづき使用の場合は免除になっている。

なお，学生，生徒の利用が中心である演習林の宿泊施設を，かつては『寄宿舎』または『寄宿』と呼んでいた。近年は『宿舎』の呼称がふつうになった。

（３）本科と実科

千演での実習の多くは，本科，実科，別々に実行された。そうしたなかで造林学実習だけは，本多静六教授指導の大正年代末まで，本科・実科合同であった。

しかし，本科の学生と実科の生徒は仲が悪いことが多く，指導補助の教官が苦労したようである。学生と生徒では，年齢，経歴がちがい，授業内容がちがい，将来にも差が予想され，仲が悪いのが自然かも知れない。

本多時代の造林学実習を特徴づけるひとつとして，毎日の記録，いわゆるプロトコルを班のまわりもちで書かせ，翌日朗読させたことがあげられる。現在，１９１６年～１９２２年の各年のプロトコルが，それぞれ製本保存されている。内容は毎年似たようなもので，のちに『清澄演習林本多教授指導造林實習日誌』[2]としてまとめられる。それらのなかで１９２１／Ｔ１０年は，たまたま実科だけの実習で，プロトコルに実科生徒の遠慮のない思いが記述されている。

この年，本多は途中からの参加で，見学での臨地講話の大半は，造林学教室の土井藤平講師が行った。地拵え，植え付けなどの作業実習については，千演の川内義左衛門助手（１９１５本科卒）が，「多少粗雑なところはあるが，諸君の熱心と意氣は開校以來初めてのこと」と評し，生徒を喜ばせる。また道案内の久保近五郎巡視は，「同じ育林作業をやれば，實科生のほうが本科生よりも，あとあとの成績が良い」と語って，ますます生徒をいい気分にさせる。

さらに久保は，川内が学生時代，直播造林実習で渡された袋入りの種子を，そのまま切株の下に入れて帰ったと披露，「今の川内先生の様子からは信じ難い」と語ったむねプロトコルに記述されている。川内の，この話は相当に有名だったらしく，筆者も長谷川孝三講師（１９１６本科卒）の『森林種苗学』講義で聞いたが，長谷川の同級生には苗木を上下逆さまに植えた豪の者もいたという。

なお，実習生に人気があり，プロトコルにしばしば登場する久保巡視は，群馬県多野郡三波川村出身，１８６７／Ｋ３年生，同村高小卒後，埼玉県秩父郡矢納村養蚕改良蚕業社で養蚕に従事，１８８７年兵役につき，日清戦争に清国盛京省安東民政庁補助憲兵として従軍，復員後，三波川村千ノ沢牧場事務所勤務，日露戦争に千葉県習志野俘虜収容所衛兵として従軍，復員後，同県君津郡久留里町郵便局に勤務した。１９１３年千演に雇用され，１９１８年農科大学巡視を命じられ１９３２年退職した。

さて，前記『清澄演習林本多教授指導造林實習日誌』の一般頒布用『實地造林の指導』には，以下の『清澄演習林』と『造林實習の歌』の二つが付けられている。

『清澄演習林』　明治三十九年卒業　林學實科

依田貞種，外同級生合作

１．房陽の天空(てんそら)晴れて　　緑翠深く聳え立つ
　清澄山の春四月　　雲の彼方(あなた)に横たはる
　希望の花を手折(たお)るべく　　いざ行かんかな諸共に
２．峨々たる山に測量し　　曠野(くわうや)の間(かん)に造林し
　我が日の本の山の美を　　育成するは我等なり

駒場の健児いざや立て　　使命を行きて果さなん
3．今清澄の山の奥　　華麗の光身に浴びて
微風に袖を吹かせつつ　　新緑深き木の間より
春洋遠く望む時　　吾又何を思はんや
4．暫時(しばし)は斧の音もなく　　春蕪(しゅんぶ)茫(ぼう)たる草原(そうげん)に
立つや陽炎(かげろう)両三糸(りやうさんし)　　胡蝶の夢も圓(まどか)にて
微妙の聲の鳥は今　　いづこの枝に調ぶらん
5．トランシットの幾据(いくすゑ)や　　チェンの數(かず)の重なりて
エンドプンクト近づきぬ　　苦心惨憺錬へてし
日頃の手並現はれて　　シュルスフェラーいくばくぞ
6．幾星霜の後の春　　吾等が植ゑし松や杉
吾等が測りし峰や谷　　又立ち歸り見る時は
無量の感に打たるらん　　無量の感に打たるらん

主たる作詞者の依田貞種は卒業後，愛知県林務官吏に任官，のち大日本山林会嘱託，日本木材協会常務理事をつとめた。また，歌人『依田秋圃』であり，雅号の秋圃は叔父の漢学者『依田學海』が名付けたという[8]。

当時の実科生徒の心意気が感じられる歌詞で，山を歩きながら歌われた[2]。佐藤　修氏によれば，駒場に入学すると間もなく，上級生指導の練習があったという。実科独立後は，千演と特別の関係がなくなったため，のちの東京農工大学林学科には引き継がれておらず，曲は定かでない。

『造林實習の歌』　　大正二年卒業　林學本科
佐藤彌太郎，佐藤利生，杉浦眞鐵合作

1．此處は東京を何十里　　離れて遠き清澄の
まづいおかずにあてられて　　友はあばらの屋根の下
2．思へば悲し昨日迄　　教室めがけて突進し
ノートにさんざん疲れたる　　頭は此處に眠れるか
3．春眠曉覺えずに　　寢て居る處を先生は
早くも大きな聲をして　　諸君ご飯は濟んだのか
4．仕方なくなく顔洗い　　飯もそこそこ仕度して
七つ道具をかつぎ出し　　山路をテクテク辿り行く
5．一寸先生の出で立を　　説明すべし聞き給へ

ポール片手に黄ズボン　　頸巻帽子は前世紀
6．地拵には鎌切れず　　鋸動かず腹はへる
箸より重きものとては　　使ひしことのなき身とて
7．樟の補植はいと易し　　生へて居るのを引っこぬき
二人で一本さし込むで　　後は野となれ山となれ
8．あゝ枝打の最中に　　降り來る雨に歸へられず
規律嚴しき中なれば　　いやいや落す二三本
9．吾人の間伐危險あり　　切らぬでいゝのを伐り倒し
皮もむかずに殘し置き　　飯のみ急ぐあさましさ
10．折角休と思ったに　　辨當食ふ爲態々と
山迄出かけて福は内　　鬼は外とは悪い洒落
11．實習済むで日は暮れて　　寄宿に歸へる心では
どうか御飯は暖かに　　おかづもよいのと願ったに
12．空しく冷へて魂は　　東京に歸ったポケットに
銅貨ばかりがヂャラヂャラと　　ころげて居るのも情なや
13．隈なく澄むだ月今宵　　心しみじみ筆取りて
實習のつらさを細々と　　親御に知らす此手紙
14．筆のはこびはつたないが　　母の同情かひ得れば
やがて來らん爲替券　　などと極め込む虫のよさ
15．林學博士ドクトルの　　本多先生の健康を
祝して茲に歌一つ　　生等が微衷を諒されよ

作詞者筆頭の佐藤彌太郎は卒業後，森林経理学所属講師，のち京都大学森林経理学講座担任教授となる。軍歌『戦友』の替え歌である。

こうした実習の機会に作られた歌は，ほかにも数多あったと思われる。たとえば武藤益蔵（１９０７本科卒）は，富山節の替え歌を紹介している（大正昭和林業逸史，上，p.48,1971）。

以上の実習の状況から，千葉（清澄）演習林創設後の実地整備に，実科生徒ならびに実科卒業生がはたした役割は大きい。そうした自負が，実科の独立に当たり，千演を東京高農の附属演習林にとの陳情になったと思われる[6]。

（４）他大学などの実習

資料は断片的であるが，往復文書に登場する学校名，実習名を以下にまとめる。

［明治・大正期］

千演の整備が，まだ不充分だったせいか，カリキュラムにもとづく定期的な他校の利用はみられない。往復文書に残る，最初の見学希望は，１９００／Ｍ３３年１０月の御宿高等小学校高等科３,４年男子生徒である[CM33/10/23]。１９０６年には木曽山林学校２,３年生徒の修学旅行での立ち寄り希望がみられる[CM39/05/27]。

さらに林学関係では，盛岡高等農林学校林学科生徒の修学旅行での見学が１９０９／Ｍ４２年に始まり，間隔を置いて１９４０／Ｓ１５年まで続いた。表２０の例のように時期は１月が多く，南房総の森林視察に３日間をあて，清澄に１泊した。また東北帝国大学農科大学（のちの北大農学部）林学科学生も見学に立ち寄った。

表２０　大正十五年一月盛岡高農林學科二學年修學旅行日程*

日／曜	出発		車馬	到着		宿泊地	摘要
	場所	時刻		場所	時刻		
18／月				新宿追分駅	09:00		集合地
	新宿追分駅	09:00	電車	下高井戸	09:30		四谷丸太生産林視察
	下高井戸		徒歩	荻窪	11:30		杉林ヲ視察シナガラ徒歩約１里
	荻窪	11:30	電車	立川	12:28		12:08 国分寺デ汽車ニ乗換
	立川	12:34	汽車	青梅		青梅	羽村途中下車水道施設砂防工視察
19／火	青梅	11:23	汽車	立川			三田村ニテ青梅林業視察後出発
	立川	12:01	汽車	東京		東京	帝大農學部視察
20／水						東京	目黒林業試験場，深川木場，木材防腐会社視察
21／木	両国橋	08:40	汽車	勝浦	12:00		
	勝浦		自働車	興津			
	興津		徒歩	筒森山		筒森山	造林地，間伐試験地視察
22／金	筒森山		徒歩	清澄		清澄	帝大演習林視察
23／土	清澄		徒歩	鴨川		鴨川	暖帯林視察
24／日	鴨川	07:00	汽車	水戸	18:47	水戸	
25／月						水戸	防潮林視察
26／火	水戸	00:32	汽車	盛岡	10:19		歸着

*原表は縦書き，原表の配列などを変更，字体は原文のまま

その他，大正年代には，林学関係で南京江蘇省立第一農学校生徒[CT7/06/20]，南京金陵大学学生[CT8/05/14]，地質関係で秋田鉱山専門学校生徒[CT4/02/26]，生物関係で千葉県下中等学校博物科教員[CT7/07/08]の見学希望がファイルされている。

［昭和期］

昭和十年代にはいると，岐阜高等農林学校と東京高等農林学校の林学科関係の実習が，千演で定期的に行われるようになる。

岐阜高農は１９２４／Ｔ１３年春に開校したが，演習林の設置，整備が遅れた。同

校林学科教授高嶋規孝は，１９１５年～１９２３年のあいだ，千演の主任であった。このことが１９３５年から１９４０年まで，千演を実習に利用した大きな理由と思われる。実習は１９４１年夏にも計画されていたが，同年７月～８月の『関特演』に関連した文部省からの命令で中止されCS16/07/19，以後千演の利用が復活することはなかった。同校は１９３７年，高山営林署位山事業区から演習林用地の移管を受け，その整備がようやく進んだものと思われる。

東京高農は１９３５／Ｓ１０年の実科独立により開校，同校の演習林が設置，整備されるまで，林学科の実習には東大演習林が利用された。開校まもない１９３６年度実習予定表には，造林，森林経理，製炭実習が千演，森林土木実習が秩演，測量，理水及砂防実習が愛演で実施となっている。こうした利用はしだいに減り，千演では１９４３年の森林経理学実習が最後になる。

この時代には見学の記録も増え，ここではいちいち取り上げないが，なかに１９３８年CS13/03/15，１９３９年CS14/02/24の旧満洲国奉天農業大学林学科学生の千演立ち寄りがある。引率の同大学教授牧　俊夫は，１９２３年～１９３６年のあいだ，千演の主任であった。両年とも農学科，獣医学科と合同での修学旅行で，１９３９年のばあいは，３月８日奉天（瀋陽）出発，同月２９日帰着となっている。

参考までに見学場所を日程順にあげる。専門に関係の深い見学は一部に過ぎない。

京城：朝鮮神宮，総督府，動植物園
箱崎：箱崎神社，九州帝国大学，東公園，千代ノ松原
阿蘇：阿蘇山並びに裾野放牧場
大阪：大阪城，電気科学館，市内見学
宇治山田：皇大神宮，徴古館，農業館
名古屋：師団司令部，名古屋城，市内見学，熱田神宮
岡崎：国立種鶏場，種畜場，追進農場
鎌倉：名所旧跡
横須賀：鎮守府，軍港軍艦，三笠紀念艦，海軍病院
東京：宮城，満洲国大使館，明治神宮，新宿御苑，靖国神社，遊就館，東京帝国大学農学部，陸軍省，海軍省，陸軍第一病院，博物館，動物園
京都：桃山御陵，京都帝国大学農学部，名所旧跡
大阪：師団司令部，中央防衛司令部，大阪毎日新聞社

東京滞在の３月２１日から２３日のあいだは，各学科別行動であった。農学科は東京中央市場，千葉高等園芸学校，農林省西ヶ原農事試験場，鴻巣試験場を，獣医学科は東京家畜市場，明治製菓両国工場，千葉県三里塚宮内省御料牧場，農林省西ヶ原獣

疫調査所を見学。林学科は農林省目黒林業試験場，帝室林野局豊住貯木場を経て，前記のように千演を見学した。

敗戦後は，専門学校の昇格および新設によって多数の新制大学ができ，林学関係をはじめ，生物学，地質学の分野でも，他大学の利用が増える。林学関係では農業教員養成所／東京農業教育専門学校に始まる東京教育大学農学部林学科の継続利用が目立つ。すなわち昭和三十年代に入って，樹木，測樹，森林経理，製炭の各実習が定期的に行われるようになる。同大は，その後筑波大学に改組されるが，測樹と森林経理の実習は，１９７５年筑波大学第二学群が設置されるまで続いた。

生物関係では，東京学芸大学の実習が一時期続き，また県内の千葉大学園芸学部および理学部の実習利用が継続中である。

高校では，地元，君津農林高校の見学実習が毎年行われている。また一時期継続した鹿沼農商高校の実習は，田添　元校長の時代に始まった。

本学他学部では，戦前からの理学部植物学教室の採集，生態関係の実習，地質学教室の地質調査関係の実習が続いている。

表２１に，１９７０年ごろまでの往復綴に残る実習をまとめた。その後の実習については，別の記録がある[7など]。最近の状況は，１９７７年概要，１９８８年概要から知ることができ，また１９８２年～１９８４年の 3年間については，『国立大学演習林教育利用ガイドブック（１９８６)』に記録がある。

（5）その他

［実習用荷物の輸送］

学生実習には，いろいろな器具や材料が必要となる。明治，大正時代には，千演備え付けが少なかったので，実習のつど駒場と千演を往復する器具が多く，しかも運送手段が不便であった。宿舎の項に引用した文書『演習器具之件』は，こうした事情を伝えている。

東京・天津間の輸送は海路によったが，海上平穏なら問題なかった。たとえば，１９０４／Ｍ３７年の春には，３月２０日から造林，続いて測量の実習が予定されていた。造林学実習用のヒノキ苗 8,200本の菰包み33個，測量実習用の器具，数表，文房具をおさめた鞄，柳行李，木箱など22個は，３月１７日朝霊岸島発の船に積み込まれ，翌日には天津へ着いたようである[CM37/03/15,16]。

しかし，順調な年ばかりではない。１９１４／Ｔ３年３月は，海上荒天が続いた。千演から本演へ「ﾃﾝｺｳｱｼｸ ﾆﾓﾂﾂｶｽﾞ ｷｼｬﾆ ﾂﾐｶｴｲｶｶﾞ」の電報が出されたが，本演からの返

表２１　往復文書に残る他大学などによる実習利用（１９７０年ごろまで）

学校名	科目／実施年（ﾊｲﾌﾝの期間は毎年実施）		
北大農・林学	見学／1917*,23	(* 東北大農・林学)	
同・実科	見学／1930		
盛岡高農・林学	見学／1909,18,19,25-28,30-32,36-41		
宇都宮高農・林学	見学／1938,48		
宇大農・林学	森林経理／1968		
教養	見学／1972		
東大農・生・園二	見学／1969		
農化	見学／1976		
理・植物	植物採集／1934,38-41,58,73		
地質	地質調査／1959,60,68,71-73		
医・薬	植物採集／1937		
工・土木	地質調査／1951,76		
資源開発	地質調査／1973,74		
東京高農・林学	樹木／1935,47	造林／1936-38	測樹／1936,38
（農専）	森林経理／1935-43	森林土木／1937	製炭／1936
農工大農・林学	見学／1969,71,72	樹木／1951,54-59	
東京農教専	見学／1927**,41,46	(**本学農学部附属農業教員養成所)	
教育大農・林学	樹木／1949,51,54-57,59,60,62-65,67,68	製炭／1955-60	
	測樹／1958-68,70,71,73-75	森林経理／1956-70,72-75	
理・生物	植物採集／1973		
学芸大・生物	植物採集・生態／1962-64,66,68		
千葉高等園芸	植物採集／1938		
千葉大園芸	造園植物材料／1967-69,71-73		
理・生物	植物採集・生態／1955,57,59,60,62-66,1970		
岐阜高農・林学	見学／1933	造林・見学／1935-40	森林経理／1936,38
君津農林高校	見学／1950,53,54,58-61,63,65-67,69-75		
鹿沼農商高校	見学／1951,54,60,62,65-70		

その他（学校名／年）：弘前大教育・生物／1968，山形大文理・地質／1953，茨城大・生物／1959，埼玉大文理・生物／1955,59，お茶の水大理・生物／1951,68，横浜国大教育・生物／1969，静岡大理・地質／1970，金沢大理・生物／1967，同・地質／1972，都立大理・生物／1968，長野県立農専／1948，日大農・林学／1949，東京農大・林学／1938，早稲田大教育・生物／1968,69,淑徳女子農専／1948，恵泉女子短大・園芸／1951，千葉県農業教員養成所／1941[ES16]，安城農業学校／1938[ES13]など

事は「13ﾋﾂﾐｺﾐ 15ﾋｼｭﾊﾟﾝｼﾀ」であった。海上荒天のため外房汽船は全部勝浦に入港，下りの便なし，実習用荷物は１週間前に着くよう配慮をと連絡したが[CT3/03/20]，３月２０日，なお荷物は未着で，翌日からの造林学実習に影響したと思われる。

大正年代，鉄道は久留里あるいは勝浦まで通じていたが，なお船便による実習用荷物の輸送は続く[CT4/12/09]。１９１６／Ｔ５年１２月１６日からの森林経理学実習については，年末なので荷物の発送を早目にとの千演の要請[CT5/12/08]に対し，１１日霊岸島へ送ったとの回答[CT5/12/12]が残されている。

演習林備え付けの実習用器材が充実し，さらに本郷から自動車での携行も容易な，現在からは想像できない時代であった。

［伝染病］

１９１５／Ｔ４年１２月，亀山村蔵玉にチブスが発生した。同月１７日～３０日には，右田教授，薗部助教授指導による本科３年の森林経理学実習が，年末には川瀬演習林長による除害狩猟が予定されていた。

１２月１２日，千演主任高嶋は右田あて「ｶﾒﾔﾏﾑﾗ ｸﾗﾀﾏﾆ ﾁﾌﾞｽﾊｯｾｲ ｲｷﾎｲﾊｹﾞｼ ﾌﾀﾞｺﾞｳｷｼｭｸ ｲｶｶﾞ」と電信連絡。本演からは１３日「ﾌﾀﾞｺﾞｳﾉﾌﾞﾝﾊ ｾﾞﾝﾌﾞ ｺﾞｳﾀﾞｲ ﾄﾏﾘﾄｽﾙ」，１５日「ｶﾞｸｾｲ ｾﾞﾝﾌﾞ ｷﾖｽﾐﾄﾞﾏﾘﾆ ﾍﾝｺｳｽ ｼｭﾘｮｳﾊ1ｹﾞﾂﾆ ｴﾝｷｼﾀ」との回答があった。例年，清澄，郷台，札郷に分宿しての実習が，清澄にまとまっての実施となる。１６日千演から本演へ「ｶﾞｸｾｲ ﾎﾀﾖﾂｳｶｽﾙﾅ」と連絡，保田から天津への経路に病気の発生があったのであろう。高嶋からの照会[CT4/12/12] に対して，１７日亀山村長から防疫に努力，収容患者７名，うち１名死亡，他は経過良好で四，五日で全治との回答があった。除害狩猟は翌年１月に延期されたが，実習は予定どおり行われたと思われる。

１９１８／Ｔ７年１１／１２月，悪性感冒の流行がひどく，地元民家の状況は悲惨であった。　いわゆるスペイン風邪で，木挽職が休業のため，清澄区特売立木の搬出期限延長が認められるほどであった[HT7/12/25[C134],HT8/01/09]。千演からの連絡[CT7/12/09[C132]]により，１２月１５日開始予定の森林経理学実習は，翌年１月６日からに延期された[CT7/12/13]。１９１９／２０年冬にも感冒が流行，東京警視庁へ予防法[CT9/01/17[C169]]，伝染病研究所へ予防薬[CT9/01/18[C171]]の照会を行った。しかし，実習に影響するほどではなかった。

１９２２／Ｔ１１年９月末から，安房地方にコレラが流行，猖獗をきわめた。天津町にも発生，終熄には１ヶ月間ほどかかるとされた[CT11/10/03]。おりから中国四川省農業専門学校卒業生12名と案内者３名が，１０月９日見学予定と，本演から連絡があった[CT11/10/05]。千演では「ﾄｳﾁ ｺﾚﾗ ｲﾏﾅﾎ ｼｮｳｹﾂ ｼﾅｶﾞｸｾｲ 9ﾋｹﾝｶﾞｸ ﾁｭｳｼ ﾀﾉﾑ」の電報を出すとともに，８日が日曜日なので，北条警察署鴨川分署から警視庁を通じての連絡を，念のため依頼した[CT11/10/07]。この年，学期変更のため秋の実習は早目の予定であったが，コレラの影響で[CT11/10/03]，実施は１２月に延期された[CT11/10/07]。

以上，大正期には千演周辺地での伝染病発生で，実習日程に影響する例があった。いっぽう学科側の事情による変更として，１９４０／Ｓ１５年春の赤痢による，造林学実習の延期があげられる。すなわち，同年２月２３日開催の，東大林学会卒業生送別会後に発生した食中毒のため，１ヶ月間近く遅れて実施された。

［羊羹屋の娘ほか］

学生，生徒の仲間内での話題は，実習中も女性に関することが少なくなかった。旅館や茶店で働く女性，山仕事の女性等々，それぞれの時代に実習生の関心を集めた女性は，数多と思われるが，当然ながら資料にとぼしい。

ここでは，前記『清澄演習林』の作詞者依田秋圃の文章によって，明治三十年代の実習生に人気のあった地元の女性につきふれる。以下は写生文『平泉村の女』[9]からの引用である（原文は縦書き）。

清澄山の演習林に出かけることは學生達にとつては愉快な年中行事であつた。駒場の教室内に毎日ノートをこしらへてゐるよりは，山河を日々徒渉し森林に朝暮出入する實地演習の方が，何倍か樂しい仕事であるか知れなかつた。それだから三年間在學中には前後通じて，かなりの日數をそこに滞在する關係上，殊に旅行先といふ氣持もあるし，若い盛りの連中間には清澄山に於けるいろいろな話題が上級生から次へ次へと繼承され，又新らしい事件や問題が生み出され發見されて行つた。その話題には堅い一方の事がらもあつたし，又女に關する事がらも隨分多かつた。それには旅館の女中も噂に上らないこともなかつたが，私達の時代には土地の名物として賣られてゐた羊羹屋の娘と云ふのが美人として學生間に評判であつた。それで羊羹屋へ毎夜學生達が三人四人と連れ立つて羊羹を食べに行つた。その家は羊羹しか無い家であつたが，飽きもせずにそれを食べに行つた。けれど其の娘は殆ど學生達の居る場所へは出て來たことがなかつた。だから評判ばかりで實際肝腎の娘を見たと言ふ者は極く稀であつた。中には俺はものを言つたとか茶をついで貰つたとか云ふ者もあつたけれど，それは大抵他を羨しがらせる作り事に過ぎないのは見え透いて居るのでお互いに誰も本當にはしないのであつた。

羊羹屋の娘に次で演習林の第三寄宿舎の在る四方木といふ部落の女の噂が屢話題に供された。四方木娘と言つて其地方でも美人が多いと謳われた昔からの傳説を信じて，その方面へ測量實習などに出掛ける連中は勇み立つて行くのも多かつた。それほど若い女に就て何かと口騒しく品評し合つた連中の間にも，節君の所謂炭燒の娘お秋さんは一向話題に上らなかつた。私は『炭燒の娘』を讀むとすぐ其のことを甚だ不審に思つた。ほんたうにそんな好い娘が居たんだらうか，文章を面白くするために何でもない女をあゝ云ふやうに書いたんではなからうかとさへ思つた。然し美しい娘が居る居ないは別問題として，あの文章は誠に面白い快い作であると思つた。それで娘の実否をたしかめることなどは全く考へもせずに其儘二三ヶ月を經た。

それから私は官吏になって任地に來た。すると，そこで圖らずも清澄山のお秋さんのことを審にする機會を得た。それは新任地で私は先輩の某に出遇ひいろいろ話して

ゐるうちに，ふと清澄山の八瀬尾の製炭のことが持ち出された。すると其の友人は，お秋さんを君は知つて居るかと言つた。私はすぐ節君を思ひ出して，それはかう云ふ風な美人であつたらうと云ふと，友人は，うん，君はあれを見たことがないのかと少しあきれたやうな顔をした。果して私達より上級であつた學生達の間には有名な娘であつたのである。お秋さんといふ娘は極く真面目な女で，殆ど學生とは物を言つたこともない位だつたから，學生達も唯遠方から眺めて居ると云ふ態度であつたよと友人はおごそかな句調で言い足した。これを聞いて私は，節君のために喜ばしい安心を覺えたのであつた。

文章は，この後，八瀬尾の炭焼小屋前で撮影した，お秋さんを交えた集合写真を先輩が持っており，長塚　節の『炭焼きのむすめ』の話をしたところ，写真を秋圃に進呈してくれたことなどを記述している。この写真は後に，長塚　節全集に掲載[4]されることになるが，先輩の氏名，撮影の経緯などは不明である。

［活動写真の撮影］PT10

前記のように１９２１／Ｔ１０年春の本学造林学実習は，実科生徒のみで行われた。実習は３月２２日開始，本多静六教授は中途まで不参加で，造林学教室所属土井藤平講師が代行した。開始後まもなく土井は，日程の終わりごろ，実習状況の活動写真を撮影の予定と生徒へ言い渡す。と，たちまちスター気取りや．活弁物真似の生徒が現れる。

３月２６日：本多教授到着。プロトコルには「本多教授綱引キ臀押シノ二人ガヽリノ奇態ナ様デ，堂々御来着有リ。一同欣喜雀躍，手ノ舞足ノ踏ム所ヲ知ラズ。事務所ノ書記兼小使等モ何時ニナク色メキタリ」とある。

３月２７日：生徒は土井引率で直挿造林と直播造林の実習。造林学教室の宮下助手，千演の高嶋助教授，川内助手，中島助手は，活動写真技師と撮影場所の下見。本多についての記述見当たらず。

３月２８日：雨のため室内で，本多による人生論講話と活動写真の説明。活動写真は同年１０月奈良で開催の大日本山林大会で上映の予定。全３巻で，第１：学生登山の巻，第２：全林林相視察の巻，第３：造林の巻。説明後，生徒同志で役割分担の相談があったが，あまりに感心しない役ばかりなので，希望者なく抽選となる。

３月２９日：晴天，活動写真の撮影。以下プロトコルを引用する（原文は縦書き）。

起床六時。雨ハ名残ナク止ンデ，緑ノ空ニハ小サイ綿ノ様ナ雲ガ流レテ居タ。今日ハ活動寫眞撮影ノ日ダ。七時半過ギ寄宿舎ノ前庭ニ勢揃ヒシタ。本多先生ヲ御大将ト

シテ，一行三十有餘名ノ俄カ仕立ノ俳優カラ成リタッテヰル。

最初ニ撮影シタノガ，寄宿舎到着ノ場面デアッタ。寄宿ノ婆サンガ水ヲ容レタ盥ヲ持ッテ石ニツマヅキ轉ブナド，俳優兼撮影監督本多先生ノ妙案デアッタケレドモ，気ノ毒ナノハオ婆サンデアッタ。

次ギニ原生林ノ浅間山ニ登山。山腹ト頂上デ各々一回ヅツ撮影。頂上デハ，本多先生ノオ話シヲ聞イテイル場面ダ。木ノ枝ヲ持タレタ本多先生ノ右手ノ大寫シモアッタ。

次ギニ撮影シタ場面ヲ列擧スレバ，

清澄寺參詣ノ場

梨ノ木台ノ杉林ノ光景：ココデ径二尺七寸モアル大杉ヲ，根元カラ木ノ先端マデ撮影シタ。

枝打チ実習ノ場：松久君ブラサガリノ藝

檜林デノ間伐実習ノ場

杉植付実習ノ場

山頂ヨリ急斜面下瞰ノ光景

本多先生御自慢ノ樟林ノ景色

造林地通過ノ場

稚児ガ瀧上流土橋通過ノ場

野獸園デノ鹿ノ群，椎茸ノ撮影

松野先生記念碑參拜ノ場

コレデ今日ノ撮影ハ終ッタ。解散ト共ニ，大急ギ寄宿舎ニ帰ッテ，綺麗ナオ湯ニ這入ッテ手足ヲ延バシタラ，今日歩キ廻ハッタ山ノ事ドモガ頭ニ浮ブ。オ湯ガピタピタト湯槽デ溢レタ。私ハ俳優ハ苦シイモノ，ソシテ俳優ニハ成リタクナイモノダト思ッテ，湯槽カラ匍ヒ出シタ。

３月３０日：清澄から下山，鴨川の防潮林見学で実習終了。途中独鈷山などの撮影が行われたが，生徒の参加はなかった。

活動写真は予定どおり，１９２１年１０月８日，第３１回大日本山林大会の初日に映写された[12]。すなわち，同夜(18-21時)，奈良市尾花座での林業活動写真の上映で，内容は以下の4本立てであった。

一．東京帝國大學農學部清澄演習林學生の造林實習の状況（地拵，植付，枝打，間伐，挿木造林の實況等）

一．木曾の名勝と森林

一．高知大林區署馬路小林區署の官行伐木事業の實況

一．吉野の林業

［アルバイト実習］

夏休みなどの長期間の休暇に，林学科の学生，生徒は，各地方演習林へアルバイトをかねた実習にでかけた。　昭和初期，これらの学生，生徒を対象に出された注意を以下にあげる（原文は縦書き，原文に近い字体とし，句読点を入れた）。

夏期實習學生々徒心得

一．仝級生ニシテ仝一ノ演習林ニ赴クモノハ成ルベク仝時ニ先方ニ到着シ，仕事ヲ終ヘテ帰京ノ時モ亦仝時ニ出発スルコト（殖民地ノ演習林ニ赴クモノハ，特ニ本項ニ留意スルヲ要ス）。

二．演習林ニ到着ノ日時ハ少クトモ，二日前ニ当該演習林事務所ニ到着スル様通知スルコト。

三．演習林ニ到着シタルトキ及演習林ヲ退去セムトスルトキハ，必ズ演習林事務所ニ其ノ旨屆出ヅルコト。

四．實習中ハ諸事，当該演習林主任ノ指揮ニ従ヒ，殊ニ實習事項及其ノ場所並ニ實習中ノ宿泊所（山小屋又ハ民家ニ宿泊シ，若クハテント生活ヲナスコトアルベシ）ニ関シテハ，主任ノ指示ニ対シ異議ヲ唱ヘザルコト。

五．演習林ニ於テ課セラレタル仕事ハ，必ズ演習林滞在中ニ之ヲ完了シ，其ノ成績ヲ演習林主任ニ提出スルコト。

六．實習中ハ毎日左記ニ據リ日誌ヲ認メ，實習終了ノ際，当該演習林主任ニ提出スルヲ要ス。

日誌様式

何月何日（何曜），何々寄宿舎，何地山小屋滞在若クハ何地幕営

一．天候：晴，雨，其他

一．記事：外業ニ従事シタルトキハ出発，及帰着時刻，仕事ノ種類（何々ノ調査又ハ測定），場所（何林班何小班又ハ字何々），功程（測点数，測定本数，調査区域等）ヲ，又他ノ学生ト仕事ヲ共ニシタル場合，並ニ指導ノタメ仝行シタル演習林職員アラバ，其ノ氏名，人夫ヲ使用シタルトキハ其数ヲ記載スルコト。内業ニ従事シタル場合ニハ，其仕事ノ種類，功程

一．所感：何々

（日誌記載ニ要スル冊子ハ，各人ニツキ壱冊宛，演習林本部ヨリ之ヲ交付ス）

昭和参年六月

千演でも，夏期実習学生，生徒を受け入れており，１人当たり日給額は，Ｓ３，４年度は 1.3～1.5 円であり，Ｓ５年度は0.92円へ値下げの予定であった[CS5/05/31]。なお，太平洋戦争開戦直前の１９４１／Ｓ１６年の夏，各地方演習林へ出かけた学生は表２２のようで，外地演習林に人気があった。

敗戦後の一時期も，こうした実習がさかんで，経済的に窮乏した学生にとって，勉強にもなるアルバイトとして歓迎された[CS23/05/04[H59],26/06/16[H156],33/06/19[H153]]。

引用文献

1）服部正一(1895): 農科大學造林演習記事，山林 **149**:50-57

2）本多静六(1926): 清澄演習林本多教授指導造林實習日誌, 148p.,東大演，東京

3）市島豊山（賀田直治）(1900): 清澄山春季演習日記，山林 **210**:31-43

4）長塚　節(1904/05):炭焼日記，In: 長塚　節全集 5, 春陽堂書店，東京

5）根岸賢一郎・鈴木　誠・斯波義宏(1991)：千葉演習林沿革史資料(3),東京大学農学部林学科学生の造林学現地実習の変遷，演習林**28**:13-57

6）奥野道夫編(1936): 駒場交友會，母校獨立記念號:314-317

表２２　１９４１年夏，地方演習林での実習，卒論作成予定

演習林名	夏期実習					卒業論文		
	内容	人数	学年	氏名（専修区分）[5]	出発	専攻	氏名	出発
北海道	測量	3	2	村山　宏 (業イ)	7/16	造林	大島信夫	7月
			2	吉村春夫 (業イ)	東京	経理	平林　寛	上旬
			2	白鳥　知 (産イ)	発			
樺太	風倒木ノ	5	2	朝日正美 (産ロ)	7/22	造林	岡本　勇	7/22
	跡地ノ		1	烏丸光晴 (業イ)	東京	森化	中西光次	東京
	更新状態		1	大村　章 (業イ)	発	森化	塘　隆男	発
	調査		1	丸田和夫 (業ハ)		経理	藤井龍夫	
			1	渡辺　淳 (産ロ)				
臺灣	杉植栽木	4	2	井草俊一 (業イ)	7/15	造林	保坂文彦	7/03
	ノ測樹		2	大平正一 (業イ)	神戸	造林	神辺浩三	東京
			2	田宮芳夫 (産ロ)	発	利用	寒河江幸正	発
			2	松浦　新 (産ロ)				
朝鮮	測量	2	2	尾張安治 (業ロ)	7/17			
全羅南道			2	蓬田　中 (業ロ)	神戸発			
愛知縣						砂防	倉上　靖	7月
						砂防	舟越得三	上旬
千葉縣						造林	一木哲二	7月
						造林	栗田憲二	上旬
海南島		1	1	永田英世 (業イ)	7月中旬	森化	三浦克美	同上

7）東京大学農学部附属演習林(1977-1979):演習林試験研究計画・学生実習
8）依田福三編(1985): 依田秋圃全歌集，483p., 短歌新聞社，東京
9）依田秋圃(1922): 平泉村の女，In: 文集，山村の人々(1940), p.223-241, 朋文堂，東京
10）Anon.(1894):雑報，基本圖及林業圖，山林 **140**:64
11）Anon.(1895):雑報，農科大學林學科學生生徒の實地演習，山林**145**:62
12）Anon.(1921):大日本山林會第三十一回大會記事，山林 **472**:1-22

Ⅲ－2　歩きから車利用の視察へ

見本林，試験地などの充実とともに，千葉演習林への視察者は多くなった。視察の内容は，森林自体の移り変わり，試験研究の重点移動，森林への関心の多様化，交通手段の発達などで時代とともに変わった。その状況を各『視察案内』の変化からたどる。

（1）視察コース

明治時代は，視察者が少なく資料も乏しいが，本学総長をむかえたさいの日程を以下にあげる（原文はいずれも縦書き，原文に近い字体とし，句読点を入れた)。

１９０２／Ｍ３５年３月上旬 HM35/02/20

－山川総長，松井学長らの視察予定－

第一日　東京本所一番発，天津着・泊

第二日　天津発，清澄宿舎泊：切通新植地見分，午後清澄見物

第三日　清澄滞在：行者道ヨリ檜ノ台ニ至リ，其間老森林見物，檜ノ台ヨリ本谷ヲ遡リ，東漢沢ヲ見テ一杯水ニ至リ，新道ニヨリ帰舎

第四日　清澄発，郷台畑泊：大降西ノ炭焼ノ見分，国境ノ道ニヨリ郷台畑ニ至ル間，小屋ノ沢，池ノ沢等ノ境界査定個所ノ説明

第五日　郷台畑発，久留里泊

第六日　久留里発，木更津ヨリ東京

１９０８／Ｍ４１年５月 CM41/05/6,12

－濱尾総長，松井学長らの視察予定－

五月十七日　午前七時五十分両國發，十一時大原着，一時半頃勝浦（中食，勝浦館）

天津泊（油屋）

五月十八日　天津發，切通杉林視察，清澄（中食），午後松葉ノ大学用材伐採個所，及ビ櫻ヶ尾邊ニテ清澄林ノ全景視察，時間アレバ二ノ澤苗圃ニ至リ，清澄ニ帰リ泊

五月十九日　清澄發，都合ニヨリ二ノ澤ヲ経テ，四郎治其他便宜ノ途ニヨリ三十三曲ヲ降リ，郷臺ニ至ル，郷臺畑泊

五月二十日　郷臺畑發，清澄（中食），七曲ヲ降リ，小屋ヶ尾，樟造林地視察，新設林道ヲ經テ，天津泊

五月二十一日　天津發，皈京

濱尾は2 回総長に就任しており，上記は二回目の任期（１９０５－１９１２）中のことである。　濱尾は一回目の総長時代（１８９３－１８９７）に千演の創設・拡張に尽力し，１８９７／Ｍ３０年にも千演を視察したといわれる[2)]。

その後，見本林，試験地，実験設備などの整備が進むにしたがって，千葉演習林への視察者が増えた。

創設後二十余年を経過した大正初期には，清澄管内に，来観者のための視察コースがつくられた。１９１５／Ｔ４年９月の主任交替（薗部助教授→高嶋嘱託）の引き継ぎ覚書事項のひとつ『巡林線路ヲ設クル件』によれば，コースは以下のようである：派出所（清澄）→浅間山→妙見越→高天神→一杯水→東漢沢→太平→足谷→硯石→小屋ヶ尾→七曲→切通→内国樹種見本林→派出所。引き継ぎ時，すでに道路工事は完了，視察地点に説明を標示するよう申し送りがされている。１９２２／Ｔ１１年の第３２回大日本山林大会の千葉演習林視察は，ほぼ，このコースに沿ったと思われる。

清澄管内は奥山（札郷，郷台管内）にくらべ古いうえに，初期には試験研究は清澄，林業経営は奥山との方針があった[K1]。そこで大正時代の視察は，清澄方面が主になった。

その後，奥山方面でも試験研究面の充実整備が進む。昭和ひとけた時代の資料は見当たらないが，１９４０／Ｓ１５年の視察案内では，清澄方面 13 km　徒歩約７時間，奥山方面 24 km　徒歩約９時間，の２コース立てとなり，これに天津事務所がくわえられている。１９４２年，１９５３年の視察案内も，ほぼ同じで，記載の視察項目の完全消化には，最低２泊程度が必要であった。

１９５８／Ｓ３３年の視察案内は，記載の項目数がもっとも多い。清澄，奥山の２コースにわけていないのは，自動車利用の増加，視察者の希望の多様化などで，コース特定の意味が薄れたからであろうか。

近年は自動車を利用しての，半日か１日の視察が多い。１９８８／Ｓ６３年の視察案内資料は，こうした自動車利用の視察者向きに，以下のコースをあげている：清澄

作業所→（郷台林道・仁ノ沢林道）→今澄→（仁ノ沢林道・郷台林道）→郷台作業所→（猪ノ川林道・県道市原－天津小湊線）→札郷作業所→（県道・大仙場林道）→仁ノ沢→（大仙場林道・県道・町道）→清澄寺→（一杯水林道）→麻綿原天拝園→（一杯水林道・町道）→清澄作業所。

（２）視察項目

各時代の視察案内（Ｉ－２）に記載の項目を，表２３にまとめた。

古くから視察地が集中する清澄管内で，浅間山天然林が一貫して取りあげられているのは，その存在が，この地に演習林を創設した有力な理由ゆえ，しごく当然といえる。しかし浅間山では，近年スギの勢力が増しており[1]，この地方固有の『モミ・ツガ・広葉樹天然林』の看板が怪しくなってきた。清澄寺背後の妙見山スギ超高齢林（演習林外）は，高伐期複層林の一例として注目されているが，浅間山の将来は，こうした林相になるのではないかとの説もある。

演習林最初の造林地で，本多静六の総領息子と通称された，切通南沢のスギ林は，幼齢期から視察地になっていた。しかし，敗戦後アイオン台風，キティ台風の被害を受けたのち，さらに県道改良工事の被害もあって，近年はあまり視察の対象になっていない。最近，視察者の多いスギ高齢人工林としては，植栽が演習林以前の今澄，郷田倉と，演習林初期の牛蒡沢があげられる。郷台苗畑北側から一望の相ノ沢スギ栽培品種展示林（スギ品種別成育試験）は千演の名所となったが，１９３１年の植栽ゆえ，視察案内への登場は１９５８年からである。

アカマツ関係の視察地が，以前はかなりあったが，いわゆるマツクイムシによって，壊滅的な被害を受けた。

かつての視察案内には，薪炭材の供給を目的とする矮林の，施業法改善試験地がいくつも登場する。それらは，石油，ガスが家庭燃料の主役になるにつれ，製炭試験とともに姿を消した。

自然保全への関心から，長期間人手の入っていない天然林が注目されるようになった。札郷苗畑北側対岸に広がる堂沢の風致林や，荒樫沢のモミ・ツガ・広葉樹林が，近年は視察地として欠かせない。

見本林では，清澄管内七曲の外国樹種見本林と，長坂・三本松・速尾・大見山の内国樹種見本林が，古くから視察の対象になってきた。しかし，細かい地形の急峻な斜面に位置するため，生育の局地差が大きく，見本林としての地況には，恵まれていない。各樹種の小区画が，斜面の歩道沿いに並ぶため，視察に時間を要する。また内国

表２３／１　視察案内記載の視察項目（▲）の変遷

場所	項目[イ]	[視察案内発行年][ロ] 1915[ハ] T04	1922[ニ] T11	1940 S15	1942 S17	1953 S28	1958 S33	1988 S63
天津	亜熱帯植物園			▲	▲	▲	▲	
	実験室					▲	▲	
坂本	木材乾溜試験				▲			
中原	苗畑，薬草栽培					▲	▲	
清澄	標本館（室）	▲	▲				▲	▲
浅間山	天然林（原生林）	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
毘沙門	七本杉	▲	▲	▲				
清澄寺	境内・大杉						▲	▲
	妙見山スギ超高齢林							▲
	清澄山植物園						▲	
	仏舎利塔／太平，天津方面遠望							▲
飛越	スギ,ヒノキ,(マツ) 巣植え成育試験						▲	▲
梨ノ木台	火の見／清澄山林遠望	▲		▲	▲			
	スギ高齢林			▲				
	スギ,マツ母樹別成育試験						▲	
桜ヶ尾	スギ高齢林			▲	▲	▲	▲	
	スギ母樹別成育試験						▲	
高天神	三角点／奥山山林遠望	▲						
一杯水	林区署時代造林地	▲						
	矮林施業法改善試験			▲	▲	▲	▲	
	木材乾溜試験		▲					
	製炭試験			▲				
菖蒲沢	スギ不良造林地改良試験			▲	▲			
	スギ不良造林地施肥試験					▲	▲	
	スギ林木光合成，蒸散速度比較試験							▲
麻綿原	モミ母樹林，天拝園						▲	▲
戸立	製炭試験					▲		
東漢沢	スギ人工林	▲						
太平	スギ,ヒノキ人工林（保育・成長試験）	▲		▲	▲	▲	▲	
	木材乾溜試験		▲					
足谷	量水試験	▲	▲					
小屋ヶ尾	野獣園（ニホンジカの飼育）	▲	▲	▲				
	椎茸栽培試験	▲	▲	▲				
武者戸	苗畑，見本林						▲	

樹種見本林では，県道の拡幅工事で歩道が寸断された。こうしたことから，一般の視察項目からはずされるようになった。

県道工事による被害については，明治年代末，清澄道が県道候補にあがった時点で，

表２３／２　視察案内記載の視察項目（▲）の変遷

場所	項目[イ]	[視察案内発行年][ロ] 1915[ハ] T04	1922[ニ] T11	1940 S15	1942 S17	1953 S28	1958 S33	1988 S63
硯石	火入れ中止後の林相変化	▲						
	クス人工林	▲	▲			▲	▲	
	アカシアモリシマ人工林					▲	▲	
	製炭試験				▲			
臥牛山	クヌギ萌芽更新試験				▲			
七曲	外国樹種見本林	▲	▲	▲	▲	▲	▲	
	スギ,ヒノキ母樹・年齢・産地別成育試験		▲	▲	▲			
切通	松野先生記念碑	▲	▲					
南沢	スギ人工林（保育・成長試験）	▲	▲	▲	▲	▲	▲	
長坂ほか[ホ]	内国樹種見本林	▲	▲	▲	▲	▲	▲	
檜ノ台	スギ母樹別成育試験					▲	▲	
独鈷山	天然植物園		▲	▲	▲	▲	▲	
	スギ,サワラ人工林			▲				
今澄	スギ高齢林			▲	▲	▲	▲	▲
	アカマツ母樹・年齢・産地別成育試験			▲	▲			
仁ノ沢	矮林施業法改善試験			▲	▲			
	スギ植栽密度別成育試験							▲
スミ沢	スギ品種別成育試験						▲	
砂沢	スギ品種別成育試験						▲	
	アカマツ天然生保護林			▲	▲	▲	▲	
	アカマツ品種別成育試験			▲	▲	▲	▲	
	アカマツ植栽密度別成育試験			▲	▲	▲	▲	
	アカマツ天然更新試験						▲	
濁川	モミ・ツガ天然更新試験			▲	▲	▲		
	スギ,ケヤキ苗畑跡造林地施肥試験				▲	▲		
札郷	苗畑							▲
	見本林			▲	▲	▲	▲	
前沢	見本林			▲	▲	▲	▲	
	保護樹下造林試験			▲	▲			
堂沢	風致林			▲	▲	▲	▲	▲
郷田倉	スギ人工林→高齢林						▲	
	保護樹下造林試験			▲	▲			
神田上	サンプスギ人工林						▲	
	スギ品種別成育試験						▲	
川台	スギ採穂園						▲	
追原	アイノコマツ成育試験						▲	

すでに心配された[HM38/06/22]。そこで本沢経由の複数別路線の測量が種々行われたが，いずれも当時の技術では工事困難な急傾斜区間があり，候補路線に推すことを断念し

表２３／３　視察案内記載の視察項目（▲）の変遷

場所	項目イ)	[視察案内発行年] ロ)						
		1915ハ) T04	1922ニ) T11	1940 S15	1942 S17	1953 S28	1958 S33	1988 S63
追原	クス人工林			▲	▲	▲	▲	
上人沢	矮林施業法改善試験			▲	▲	▲		
四郎治沢	矮林施業法改善試験			▲	▲	▲		
	雨氷被害林			▲	▲			
桑ノ木沢	センペルセコイア人工林						▲	
楢ノ木台	モミ・ツガ天然更新，保育試験			▲	▲	▲	▲	
	モミ人工植栽試験						▲	
	スギ造林試験						▲	
	ヒノキ枝打ち試験						▲	
	クヌギ台切り試験						▲	
柚ノ木沢	樹下植栽試験							▲
小屋ノ沢	アカマツ母樹別成育試験					▲	▲	
(郷台)	ケヤキ人工林						▲	
	雨氷被害林			▲	▲			
	スギ人工林						▲	
	ヒノキ枝打ち試験						▲	
郷台	苗畑			▲	▲			▲
	タケ開花試験						▲	▲
	スギ多雪地方品種成育試験			▲	▲	▲	▲	
相ノ沢	スギ品種別成育試験						▲	▲
	矮林施業法改善試験			▲	▲			
牛蒡沢	スギ人工林→高齢林			▲	▲	▲	▲	▲
東ノ沢	スギ人工林			▲	▲	▲		
	矮林施業法改善試験				▲			
	ヒノキ産地別成育試験						▲	
	樹木園						▲	
檜尾	スギ,ヒノキ人工林				▲	▲		
亀ノ沢	スギ,ヒノキ,アカマツ 枝打ち試験			▲	▲	▲		
	樹下植栽試験							▲
荒樫沢	カシ類用材林			▲	▲	▲	▲	
	モミ・ツガ・常緑広葉樹林							▲

イ)統一のため，多少変更した場合がある
ロ)Ｉ－２（２）『視察案内』参照
ハ)当時の視察者用巡林コースに沿っての項目（薗部→高嶋引き継ぎ覚書による）
ニ)ほかに鍛冶坂の大日本山林会造林地および場所不詳の視察地5箇所
ホ)長坂（切通南沢），三本松，速尾，大見山

たようである[HM38/08/25]。

天津事務所構内の亜熱帯植物園は，現在では小規模で中途半端になった。１９５３

年，１９５８年の視察案内には，実験室もあげられている。昭和二十年代，光合成速度測定のためのＣO_2定量に，アルカリ吸収法の極致ともいえる山下式ガス分析計を，保有していた。

これからは，さらに自動車の利用が進むと予想される。したがって，林道，県道沿いの視察地整備が重要となる。また，首都圏自然歩道（関東ふれあいの道）が重なる一杯水林道や郷台林道部分の視察地には，とくにわかりやすい案内（説明）板が必要になる。それによって，演習林の存在意義につき，一般の理解が深まると思われる。

引用文献

1）佐倉詔夫・村川功雄・鈴木　誠(1987): 房総南部清澄浅間山における天然林の現状－上層木について－ 39回日林関東支論:57-58

2）志賀泰山(1931): 林學教育と林業勧誘，In: 明治林業逸史（続), p.262-280

Ⅲ－３　農科大学篤志林業夫→林業実地見習

千演で若干の人々が，篤志林業夫（のち林業実地見習）制度によって林業の実地を修得した。彼等の活動は，職員の少ない初期の演習林にとっても，貴重だったと思われる。

（１）84年後の帰郷

１９８５／Ｓ６０年夏，天津事務所二階で毎月恒例の掛長主任会議が開かれた。終わり近くになって，演習林が清澄区から借用中の墓地区画の話がでた。この墓地は，郷里を遠く離れ赴任してきた職員のために，昔，演習林が借りたもので，かなり以前は仮埋葬用として利用されることがあった。しかし近年は，そうしたことも絶えてなく，ただ古いお墓がひとつ残されているので，毎年盂蘭盆の供養を続けているとのことであった。

墓石は立派なもので，『森　榮太郎君墓，農科大學篤志，肥前平戸人，明治三十五年八月一日没』とある。しかし，詳細は不明であった。没後80年以上を経過，三十三回忌，五十回忌もとうに過ぎ，もはや神様との声もあり，墓地を区へ返すことにきまった。

翌１９８６年６月，まったくの突然，市川市南行徳在住の森　幹雄医師から，この

お墓につき照会があった。森　榮太郎氏は同氏の大叔父にあたり，このほど清澄寺の過去帳からお墓の所在にたどりついたとのことであった。同年８月，遺骨は84年ぶり故郷平戸の榮太郎氏両親の眠る墓地に改葬された。演習林が墓地の返還をきめた翌年のことであり，盂蘭盆を前に，死者が血縁者を呼び寄せたとの噂があった。

榮太郎氏は三男で，兄が青森の国有林に勤務，同じ方向をめざしての『篤志林業夫』であったが，千演で脚気にかかり，母親が送ってきた煎り糠のかいもなくの病没という。まだ脚気は難病で，その原因として，海軍軍医総監高木兼寛の栄養障害説と，陸軍軍医総監森　林太郎（鴎外）の病菌説が対立していた時代であった。

（２）制度，規則

『篤志林業夫』は，演習林で林業実地の修得を希望する者を対象に，１９００／Ｍ３３年に設けられた制度である[2)]。農場での農業実地の修得を目的とした『篤志農夫』制度は，すでに東京農林学校時代にあり，農科大学に引き継がれ，１８９１／Ｍ２４年には農科大学篤志農夫規則が制定されている[1)]。

その後，養蚕室，桑園，演習林などでの修得希望者が増えたので，篤志農夫のほかに，篤志蚕業夫，篤志林業夫制度が上記のように１９００年におかれた。さらに時代とともに，実業学校卒業者など学力ある希望者が多くなったので，１９１３／Ｔ２年に名称を変更，『篤志林業夫』は『林業実地見習』となり，修業年限が３ヶ年から２ヶ年に改められた。

実際には各時代の状況に応じ，この制度は，かなり弾力的に運用されたようである。当初は，本演もしくは林学科で１年間，千演で１年間の実地教育をめやすとした[HM37/?]。しかし，千演では制度の詳細を知らなかったのか，１９０４／Ｍ３７年，地元出身者を半年ほど業務に従事させたのち『林業見習生』としての受け入れを，農科大学長に上申した[HM37/11[C127]]。本演からは『篤志林業夫』としてなら可能[HM37]，ただし本学から修了証書を付与する以上，全期間千演だけでというのは疑問[HM38/02]との回答であった。

その後，昭和になると，千演のみの場合が多くなり，千演主任から演習林長にあてた修業状況報告がみられる[CS15/03/22[C346]]。

１９４６／Ｓ２１年には，地元亀山村青年学校長から，在校生を林業実地見習にとの要望があった。千演では，教育方法などを含む林業実地見習規定（案）を添えて，この件を本演に照会した[CS21/08/03[C99]]。千演案をもとに本演で制定の内規全文を，以下にのせる[CS21/11/01[H379]]（原文は縦書き，原文に近い字体とした）。

東京帝國大學演習林林業實地見習規程

1．演習林ニ於ケル林業實地見習ハ，林業技術及林學ノ修得・練磨ヲ目的トスル。特ニ個人教育ニ重點ヲ置キ，主トシテ見習生ノ希望ニ基キ專門技術ノ涵養ニ努メル。

2．實地見習期間ハ一ヶ年トシ，中等學校・青年學校本科卒業以上ノ學力アルモノヲ收容スル。但シ本人ノ希望ニヨリ期間ヲ延長スルコトハ差支ナイ。

3．學科課程ハ概ネ別紙ノ通リトスルモ，實習・實驗ヲ通シテ學術ヲ習得セシメルヲ本旨トスル。

必要ニ應ジテ特別講義或ハ見學・視察ヲ課スルモノトスル。

又，事情ノ許ス範圍ニ於テ本學々生ノ行フ實習ニ參加スルコトヲ得セシメル。

4．教官ハ東京帝國大學演習林及ビ林學科ノ教官ヲ以テ之ニ充テル。

5．課業ハ毎年四月一日ニ始マリ三月三十一日ニ終ル。學期ヲ設ケル事ナク又，春・夏・冬ノ定期休暇ヲ設ケナイ。

6．休日ハ大祭日・祝日・日曜日ノ外，必要ニ應ジテ教官ニ於テ適宜之ヲ定メル。

7．採用ハ毎課業年度ノ始メトスルモ，場合ニ依リ中途採用ヲ認メルコトガアル。

8．見習生ハ演習林内ニ起居シ，教官ノ指示ニ基キ規律アル自治・共同生活ヲ行フヲ原則トスル。

9．第2項規定ノ資格アル見習希望者ハ毎年三月十日迄ニ左記書類ニ願書ヲ添付シテ東京都本郷區東京帝國大學農學部長宛ニ提出スルヲ要スル。

記

1)履歷書

2)中等學校又ハ青年學校ノ卒業證明書及ビ最終學年ノ成績表

3)家庭調書

10．採用ハ書類詮考ヲ本則トスルモ，必要ニヨリ學課試驗，口答試問ヲ課スルコトガアル。

11．特ニ定員ヲ定メルコトナク，適當ト認メラレタルモノノ内ヨリ採用スル。

12．採用ヲ許可セラレタルモノハ保證人連署ノ上，誓書ヲ提出スルコトヲ要スル。

13．病気又ハ已ムヲ得ナイ事由ニ依リ引續キ三ヶ月以上就學出來ナイ者ハ，許可ヲ得テ休養スルコトガ出來ル。

14．修學途中ニ於テ已ムヲ得ナイ理由ニヨリ退所セムトスル場合ハ，保證人連署ヲ以テ願出テ許可ヲ受ケルヲ要スル。

15．左ニ該當スル者ハ退所ヲ命ゼラレル。修學ノ見込ナイ者，共同生活ニ不適當ナ者，理由ナクシテ作業其他ノ行事ニ缺席シタ者。

16．修學費ハ徵シナイガ，食費其他自己ノ入費ハ自辨トスル。

17. 學術，性行優良デ他ノ模範トスルニ足ルト認メラレタモノハ表彰セラレル。
18. 諸規定ニ違背シタ者，特ニ見習生ノ本分ニ悖リ，共同生活ヲ害シ，他人ニ迷惑ヲ及ボス如キ行為ガアッタ場合ハ懲戒處分ニ附セラル。
19. 課業ニ對シテハ，夫々担當教官ニ於テ成績ヲ定メル外，勤怠・操行等ニ關スル教官ノ所見ヲ取纏メテ，綜合成績ヲ定メル。
20. 所定ノ課業ヲ修得シタル者ニハ，實地見習終了證書ヲ授與スル。

學科課程

科目	教授要項	
造林學	1)造林學ノ概要	
	2)主要並ニ特用森林樹木ノ造林（含保護）	實習
	3)森林種苗	實習
	4)森林植物	實習
	5)森林立地及土壤	
森林經理學	1)林業經理學ノ概要	
	2)簡易施業案ノ編成，檢定，實行	實習
	3)測樹	實習
森林利用學	1)伐木，造材，運材方法	實習
	2)森林機械（搬出及製材機械）	實習
	3)木材理學及化學，特ニ木材加工	實習
	4)林産製造（製炭並ニ特用林産加工）	實習
	5)特用林産物ノ採取・加工	
森林土木學	1)測量及製圖	實習
	2)林道及軌道	實習
	3)理水及砂防	

結局，青年学校在校生の採用はみとめられないことになった。規程にもられた修得内容は，充実したものである。現在も林業実地見習の制度はあるが，希望者が稀なため，この規程の存在は，あまり知られていない。

（3）修業者の記録

往復文書綴に残る，千演関係の篤志林業夫（のち林業実地見習）の氏名，時期などを，表２４にしめす。

表２４　篤志林業夫（のち林業実地見習）修業者記録

氏名	期間	出身地	最終学校，その他	資料
森　榮太郎	1902/M35ごろ	長崎県平戸	M35/08/01 没	なし
川添勝次郎	1902/M35ごろ			HM35/09/20[C144]
鍵山與三郎	1902/M35ごろ			HM35/09/20[C144]
鎌田宮次郎	1905/M38（出願）	亀山村蔵玉	高小　のち千演に勤務	CM38/02/24
臼杵　平吉	1907/M40-1908	新潟県佐渡	本学苗圃で１年修業後	CM40/05,CM41/03
谷　　國藏イ)	1908/M41-1909	兵庫県氷上郡		CM42/04/30
牛込　常芳	1917/T06-	群馬県前橋	中之条農	CT6/05/15, HT6/06/07
喜多村　勝ロ)	1922/T11-1923		のち千演に勤務	CT11/05/24[H35],CT12/05/23
秋葉　岩男ハ)	1938/S13-1940	印旛郡富里	多古農	HS13/03/23,CS15/03/22[C346]
小松　　正ハ)	1938/S13-1940	福島県西方	会津農林	HS13/03/26,CS15/03/22[C346]
田村　源英ハ)	1942	市原，大久保	（在籍4ヶ月間）	
粕谷　孝一ハ)	1947/S22-1948	黄和田畑	木更津中	CS22/05/19[C59],CS23/03/20[C433]
粕谷　和之ハ)	1947/S22-1948	黄和田畑	君津農林	CS22/05/19[C59],CS23/03/20[C433]
中村　　昭	1950/S25-1951	山武郡増穂	東京農大専	CS25/07/27,CS26/08/06
朝生　平作	1956/S31-1957	上総町蔵玉		CS31/05/01,CS32/04/25
大部　享克	1965/S40-			CS40/04/27[C31]

イ)実地見習とあり，同時代ほかに狩野幸之丞，井上達四郎の名前もある(M42派出所日誌)。前記の『林業見習生』と同じ ｹｰｽ かも知れない。長塚　節『炭焼のむすめ』には佐渡から造林見習いにきた『けら』という人物が登場する。1905/M38 年5 月のことで,表に該当者は見当たらない。上記と同様に,林業の実地見習ということで受け入れた可能性がある。
ロ)千演に勤務後，東京高農助教授として同校の演習林整備に尽力した。
ハ)佐藤　修(1995): 千葉演の思い出，演習林 **33**:57-103に修業状況の記述がある。

森篤志の資料が見当たらないなど，若干の脱落が考えられる。同時代の川添，鍵山両篤志の文書は，両名が病気療養のための帰省から千演に戻ったことを，主任松村助手から川瀬演習林長，本多静六教授あて報じた内容である。森篤志が病没して間もない１９０２／Ｍ３５年秋のことであり，往時の苦労が偲ばれる。この年３月の平四郎茶店の火災消火に，篤志林業夫が参加したとの記録がある[HM35/03/21]。また鍵山篤志が１９０１年１１月，日光から千演へ，養魚試験用の鱒卵を届けたとの記録がある[HM34/11/24]。

前述のように千演では，『林業見習生』受け入れを考え，１９０４年地元出身の鎌田宮次郎，鈴木新作の2 名を業務に従事させたが[HM37/11/30[C127]]，そうした例はないと本演からの回答があった。翌年，鎌田氏は２年間の篤志林業夫を出願したが[CM38/02/24]，1 年間は本演で修得をとの条件があり[HM38/02/?]，実現したかどうかは明かでない。臼杵篤志，牛込，喜多村両見習の場合は，本演での修得を終えてから，千演にきている。

昭和に入ってからの見習は，いずれも千演だけで１～２年間，修業を行った。高原千演主任から三浦演習林長あて，以下のような見習状況の報告がある[CS15/03/22[346]]（原文は縦書き，原文に近い字体とした）。

林業實地見習生ニ關スル件

昭和十三年四月一日ヨリ當演清澄作業所へ御派遣相成候林業實地見習生，秋葉岩男，

小松　正ノ兩名ハ本月末日ヲ以テ左記事項ノ如ク滿二ヶ年ノ實地見習期間完了候ニ就テハ修了證書御交付方御取計被成下度此段及上申候也。

追而　修業期間中ハ兩名共克ク勵精，其成績亦拔群ニ付申添候

修業事項

1.製炭事業ノ實行
1.苗圃事業ノ一般
1.人工造林並ニ撫育事業ノ各種
1.天然更新事業ノ實行
1.各種土木事業ノ實行
1.森林保護，防火線事業，境界調査等
1.植物採集並ニ腊葉整理
1.材鑑採取並ニ整理
1.材積測定，測量，氣象觀測等
1.試驗地並ニ試驗事項ノ調査補助
1.前各項調査報告書ノ作成等

尚本學施行ノ學生實習，造林，測樹，經理ノ各實習ニ參加シ，何レモ實踐窮行セリ。

昭和四十年代初期を最後に，千演での見習生受け入れはない。森林・林業関係の教育機関，研修機関の整備充実が各所で進み，長期間演習林だけで研修をの時代は去ったと思われる。現在林業実地見習は，Ｓ４２年施行の『東京大学農学部附属施設実地見習生内規』に規定され，学部研究生制度とともに林学科の聴講希望者に利用される場合がある。

引用文献

1）東京帝國大學 (1932):東京帝國大學五十年史，上冊， p.1425-1429
2）同上 (1932):同上，下冊，p.535

Ⅲ－４　林業技術の普及

千演では，各種試験地・見本林の公開や，地方で開催の講習会への講師派遣，地元で開催の講習会への協力などをつうじ，広く林業技術の普及につとめてきた。

（１）大正年代，昭和年代戦前・戦中期

大正年代に入ると，各種試験地，見本林が充実し，それらを結ぶ見学路が整備され，また清澄に，本格的な寄宿舎が新設された。それとともに，民間や国有林からの見学者，視察者が増え，また他機関が主催する林業技術の研修会，講習会に利用されることが多くなった。

民間からの視察希望として，１９１８／Ｔ７年４月，県下夷隅郡長から郡内林業家50余名の見学申し込みがあった[CHT7/04/20]。その後，民間，国有林，御料林，各県関係者からの見学，視察の申し込みが，往復文書綴にぽつぽつとファイルされるようになる。

この時代の特徴のひとつとして，国有林などの行う部内研修への協力があげられる。東京大林区署（のち東京営林局）からは，すでに１９１４／Ｔ３年春，林務教習生が見学に来演したが[CT3/03/12]，その後の一時期，同署は千演の協力によって長期間の教習を行った。すなわち，第９回『森林主事林務教練』を，１９１９年１月中旬から90日間実施したが，うち２月４日から３月１５日の40日間の実習課程は千演で行った[HT7/12/18][機1062]。千演では，教習生約50名を清澄寄宿舎へ受け入れ，実習用具，実習材料を提供し，主任高嶋助教授が種々指導した[HT7/12/20]。

同じく第１０回は，１９２０年３月７日～２０日の期間[CT9/02/06]，第１１回は，１９２１年３月１３日からの２週間[CT10/01/19]を千演で行った。１９２７年，１９２９年にも教習の記録があるが，筒森国有林から立ち寄る形になり，千演での期間は２日間に短縮された[CS2/04/04,CS4/05/13]。

この時代には，帝室林野（管理）局の職員も，部内講習の一部として，しばしば千演の見学に訪れている。１９２１年４月には５日間の日程で実地見学を行ったが[CT10/03/31]，１９２３年，１９２８年，１９２９年，１９３１年には，いずれも筒森国有林から来演しており，千演での日程は１泊２日に短縮された[CT12/06/04,CS3/10/22,CS4/10/16,CS6/10/14]。この時期，筒森国有林では各種試験林の整備が進み，それにつれて国有林，御料林による千演の利用が減ったと考えられる。昭和年代戦前期の本学造林学現地実習では，日程のうちの１日を，筒森試験林の見学にあてた年がある[3)]。

大正年代末から昭和年代初期の１９２６年～１９２９年の期間，山林局主催の『製炭技術講習會』が民間を対象に毎年行われ[CHT15/09/14,CS2/07/25,CS3/08/08,CS4/08/19,CS5/10/01]，千演の製炭関係職員が協力した。

のち，この講習会は大日本木炭協会に引き継がれ，全国各地での開催となる。１９３３年７月２４日～２５日には，同協会の第１回見学会が千演で行われた[10)]。この時

代，千演の製炭技術者もまた，各地で製炭関係の指導を行った（Ⅱ－３）。

１９３９／Ｓ１４年，すでに日中戦争下であったが，山林局による第１回『營林署擔當區詰員教習』が行われ，その一部３月２６日～２９日が千演の見学にあてられた[CS14/02/03]。この回は千演の会計検査と日程が重なったため，造林学教室の中村賢太郎教授，中村得太郎助手が応援，千演職員とともに案内説明を行った。教習生 120名は4班に分かれ，清澄寄宿舎と清澄館に分宿，１日が清澄周辺，１日が札郷，郷台方面の見学であった（Ｎメモ）。第２回同年１０月，第３回１９４０年３月[CS15/02/02,25]，第４回同年６月，第５回同年１０月[HS15/10/12]，第６回１９４１年３月[ESS]，第７回同年１１月[CS16/10/23]であった。第８回は１９４２年３月で，このころには太平洋戦争下，食糧事情がますます悪くなったとみえ，飯米は山林局で手配するとの添え書きがある[CS17/02/19]。さらに１９４３年３月にも計画されたが，学生実習と重なったため[CS18/03/18]，１１月に延期された。以上の一連の『營林署擔當區詰員教習』については，佐藤による詳細な記述がある[4]。

なお臨時的なものとして，東京営林局主催『林業ノ講習及講話』が，満洲国森林官吏候補者40名を対象に，１９３９年４月～６月の期間，清澄で行われた[HS14/03/29]。

また民間主催の講習会として，１９１９／Ｔ８年８月の大日本山林会による第１回『林業講習會』があげられる。受講者は，各府県林業技術員および甲種農林学校，同農学校の林学担任教員であった。内容は８月１１日から10日間の駒場林学教室での講義と，同月２２日から３日間の千演での下記実地講習からなる。

川瀬善太郎：　千葉縣下演習林ノ經營
本多静六　：　造林
右田半四郎：　森林ノ施業
高嶋規孝　：　木材乾餾及椎蕈栽培

参加者は75名で，清澄寄宿舎，清澄館，小梅屋に分宿した[CT8/06/04,14,19/07/02,08/02,11,16]。翌１９２０年８月にも第２回講習会の実習が千演で行われたようである[CT9/08/02]。また，大日本山林会第３２回大会は，１９２２／Ｔ１１年４月，千葉市で開催されたが，大会後の視察旅行で，約250名の会員が千演を訪れた[9]。

この時代，千葉県とのつながりでは，県の主催する『縣下男女青年團體指導者講習會』会場に，清澄寄宿舎を提供している。内容は，林業，林学と直接の関係はないが，清澄のような環境下で行うことに意義があったと思われる。講習会は１９２１／Ｔ１０年に始まり，１９３０年まで続いた。ほぼ毎年春か初夏に，３泊４日か４泊５日の日程で，50名程度が参加した[CT10/04/15,CT11/04/26,CT12/05/04,CT14/06/04,CS2/05/31,CS3/05/18,CS4/05/13,CS5/05/17]。なお１９３３年には，同県主催の『中堅青年講習會』が開かれて

いる[CS8/10/24]。

当時は，清澄寄宿舎のような宿泊施設が少なく，ほかにも幅広く利用されたようである。千葉県主催第１回『縣下小學校長講習會』[CS9/06/28]，千葉県主催『海外移民教育講習會』[CS9/07/20]，千葉県社会事業協会主催『融和事業指導者及教育關係者講習會』[CS11/09/11,CS14/01/25]（１９３６年は中止），帝國耕地協會主催『開墾及耕地整理短期講習會』[HS12/04/05]などの記録が残されている。

（２）昭和年代戦後期

太平洋戦争末期から敗戦後しばらくの期間は，諸事情がきびしく，外部からの見学者は僅かであった。１９５２／Ｓ２７年１０月，大日本山林会優良林業地視察団一行24名の来演があった[2)]。翌１９５３年５月には，昭和天皇，皇后両陛下の千葉県下御巡幸があり，千演に立ち寄られ，天津構内亜熱帯植物園，七曲・外国樹種見本林，清澄作業所周辺を御覧になった[5,11)]。このころから見学者が増えたようである。

１９４９年，林業の普及指導事業の組織として，林野庁指導部に研究普及課が設置され，都道府県の各林務関係部課および林業研究指導機関に，林業専門技術員（ＳＰ），各林業事務所に林業改良指導員（ＡＧ）を置くことになった。千葉県林務課に翌１９５０年，技術普及係が新設され[7)]，県による林業関係の各種研修がさかんになり始めた。当時は，研修会場に清澄寄宿舎も利用され，『千葉県林業経営指導員講習会』[CS26/12/24,HS29/04/05]，『千葉県林業技術普及員講習会』[HS28/05/02]，『千葉県森林組合役職員講習会』[CS30/08/31]，『林道開設事業講習会』[CS32/06/07,CS33/05/30]などの記録がある。

なお，国有林関係からの利用として，１９５３年の東京営林局による『担当区主任研修生実習』[HS28/05/02]，１９５８年の林野庁による『森林火災保険講習会』[CS33/02/01]などがある。こうした県や国による清澄寄宿舎の会場利用は，昭和三十年代初めまでが多く，その後は各機関の研修施設の充実などにより少なくなった。

１９５４／Ｓ２９年４月，千演林長は高原末基助教授から渡辺資仲助教授に交替。当時，千演の植樹造林は，植付け当年の成長が０に近かった。渡辺は芝本武夫教授[6)]らの協力をえて，苗木の生理面から，その原因を種々検討した。その結果が，いわゆる『ていねい植え』の提唱となった[8)]。さらに渡辺は，施肥試験などを行い，それらにもとづいて，『造林技術の再検討』を進めることになる。

ときは，復興造林から拡大造林へと向かう造林意欲の高い時代であった。千演での試験成果は，多くの林業関係者の関心の的となった。渡辺は日本各地からの依頼で出

張し，『造林技術のみなおし』，『良い苗木の考え方とその仕立方について』，『新しいスギの造林技術』，『明日の造林』，『これからの林業経営』などの題目の講演を行った。

表２５　往復文書綴に残された視察，研修の申し込み（１９６７年，１９６８年）

期間　月／日	視察者所属機関，研修名称など	人数	資料
１９６７／Ｓ４２年			
02/01-03	名大・農・演習林職員	2	CS42/01/19
02/14-15,02/23-24	韮崎林業事務所，山梨県有林営林区員	各６	CS42/02/06
02/14-15	静岡林業事務所	14	CS42/02/07
02/25	東京都，ＳＰ＋林業教室＋檜原村森林所有者	3+10+5	CS42/02/17
03/09-11	富岡営林署員	4	CS42/02/21
03/14-15	長野県林業教室，第３回後期総合研修	40	CS42/02/10
03/26-31	水利科学研究所	35	CS42/01/24
07/06-07	宇都宮地区林業研究クラブ協議会	50	CS42/06/12
08/04-13	林業講習所，養成研修専攻科	20+3*	CS42/05/15
09/09	宮城県森林組合連合会役員	50	CS42/08/30
09/21-23	秋田市有林看守人，職員	5	CS42/08/14
09/28-30	埼玉県林業教室	10+2*	CS42/03/13,09/16
10/18-19	関東ブロック造林事業関係者	-	CS42/10/02
10/27	群馬県吾妻林業事務所管内森林組合員	53	CS42/10/12
11/15-16	農工大・農・林職員	6	CS42/11/08
11/15-17	山形県林業教室，集団討議研修	33+2*	CS42/07/22,10/31
11/27-28	三重県林業研究グループ連絡協議会	30	CS42/10/19
11/30-12/01	岩手県林業教室，第４回	50	CS42/11/02
12/06-09	福島県林業教室，第４回	49+2*	CS42/05/06,11/02
１９６８／Ｓ４３年			
03/01-02	福島県郡山地区林業経営協議会	-	CS43/02/08
03/06-07	長野県林業教室，第４回総合研修	35	CS43/02/09
03/08-10	福島県，ＳＰ＋ＡＧ	2+21	CS43/02/01,20
04/11	群馬県上野村森林組合役員	50	CS43/03/30
05/23,05/28	郡山営林署	-	CS43/05/14
07/11-12	山形県鶴岡市少蓮寺田川林友クラブ	15	CS43/06/20
07/26-08/06	林業講習所，養成研修専攻科８期	20+4*	CS43/05/12
08/26-28	秋田市有林看守人，職員	5	CS43/06/05
10/24-26	埼玉県林業教室	10	CS43/04/27,10/05
10/28-29	千葉県有林保護監視人研修	30	CS43/10/02
11/13-15	山形県林業教室	30	CS43/08/08
11/18-19	岐阜県青壮年林業同友会	15	CS43/10/20
11/20	茨城県那珂町山林樹苗組合	100	CS43/10/31
11/27-29	岩手県林業教室	40	CS43/09/12
12/06	福島県会津郡下郷町産業課林業係	2	CS43/11/25
12/11-14	福島県林業教室，第５回第２次総合研修	47+3*	CS43/05/16,11/16
12/25	福島県富岡林業事務所管内樹苗生産者	10	CS43/12/11

*引率者，講師など

これらにより，千演を訪れる視察者，研修者は年々多くなった。

来演者の増加は，往復文書綴および各寄宿舎の芳名録に明らかである。ここでは渡辺の定年退官が間近い，１９６７年と１９６８年の状況を表２５にまとめた。渡辺が千演に着任した１９５４年ごろには，こうした来演者が年間５件前後であった（往復文書綴による）のにくらべ，いちじるしい増加といえよう。表から来演者は，造林作業の忙しい春に少ないこと，関東，東北および関東に接した中部地方からが多いこと，国有林，公有林，私有林関係の視察者のほか，各県の林業教室研修生の多いことなどがわかる。

『ていねい植え』に始まる『造林技術の再検討』の成果の見学と，関連の実習を内容とする研修の受け入れは，１９６０年前後から始まったようである。研修者は多様で，たとえば，静岡県林業技術研修生を『造林，撫育技術の再検討』のテーマで，１９６０年は2/24-3/6の期間に 9+1名（研修生＋引率者）CS34/12/28,35/02/16，１９６１年は2/23-3/4に 5+1名（ほかに短期 4名）CS35/12/06, 36/01/11,02/14,21，１９６２年は2/1-7 に 6+2名CS36/11/27,12/13,37/01/25，三井物産山林部現場員を１９６１年1/23-27に10名CS35/12/22，東京営林局職員を『植付け方法』で１９６２年5/31-6/2に31名CS37/05/29といったようである。

１９６１／Ｓ３６年度，国は林業普及指導事業のなかで，『山村中堅青年養成事業実施要領』を制定，これを受けて各県では研修会などを始めた。たとえば，千葉県では同年『山村中堅青年研修会』を始めたが，１９６４年には強化充実して『山村中堅青年林業教室』と改称した[7]。このころから各県の林業教室のカリキュラムに，千演での研修が取り入れられ，多数の研修生が来演するようになる。往復文書綴により各県林業教室の来演年を以下に示す：千葉県1965,66,69, 東京都1965,66,67，埼玉県1965-70, 栃木県1964，長野県1965-68，福島県1964-1970,山形県1964,67-69, 岩手県1965-1971 。各林業教室の人数，研修日数は，表２５のようにさまざまであるが，いずれも渡辺が講師として参加した。なお，林業講習所，養成研修専攻科の研修が，１９６３年から１９６９年の期間，毎年夏に10日間行われ，うち２日間の造林の講師は渡辺であった。

１９６９年３月，渡辺資仲教授定年退官，千演林長は，その後長期間にわたり空席が続く。この年１０月，千葉県林業普及指導事業20周年記念式典があり，千演は『林業普及指導事業推進協力功労者』の感謝状を県から受け取ったCS44/10/06［千葉県林号外］。

しかし，渡辺の退官とともに視察者，研修者は年々減少する。林業を取り巻く諸状況の変化もあるが，それまでも大学演習林として一般的な林業技術の普及に，どの程

度かかわれるかにつき，種々の考え方があった。

いっぽう演習林の研究利用は，従来，東大林学関係者が中心であった。しかし，このころから，演習林の存在基盤を確固とするためにも，研究利用者の所属や専門の制限枠を取り払ったほうが良いとの考えが，演習林関係者間に生まれた。

間もなくの大学紛争を契機に，本学大学院林学専門課程学生が増加，また上記の研究利用制限枠も急速に緩和された。その結果，本学学生をはじめ，他大学所属教官，学生などからの研究利用希望が急増し，それらへの対応のなかで，千演の技術研修に対する姿勢は，数年にして変化するのである。

すなわち，１９７１年９月，岩手県林業教室の研修利用依頼CS46/09/21 [岩手県林政673]に対して，科研特定研究に参加した各大学の利用が多いため，清澄寄宿舎の宿泊には応じられないと，千演は回答CS46/09/27[C251]。同教室は清澄寺に宿泊して行われたが，山形県林業教室からの申し込みにも，同様の回答をしたようである。以後，林業教室研修の記録は見当たらない。

上記の文部省科研特定研究の全体の課題は『人間生存』，千演を主なフィールドとした研究班の課題は『房総丘陵清澄山・高宕山地域の自然と人為による影響』で，『陸上生態系の人為による攪乱の生物に及ぼす影響とその改善に関する基礎的研究』班に属した。研究班は，東大農・林学，農・演，理・生物，理・人類，海洋研・資源解析，東京農工大教養・生物，東京農大，東京水産大水産資源，東京都立大理・生物，東京経済大教養・生物，早大教育・生物，国際基督教大教養・生物，女子栄養大教養・生物，千葉大理・生物，京大理・動物，習志野高，小岩高，小金小，山階鳥類研，上野動物園水族館に，それぞれ所属の，教官，院生，学生57人で構成され，植物，土壌，霊長類，哺乳類，鳥類，爬虫類，両生類，魚類，無脊椎動物の各専門分野にわかれて，研究を行った。なお，この研究班を母体に『房総の自然研究会』が発足し[1]，現在も千演を中心とした地域の自然誌的な研究を継続している。

以上のように１９７０年前後から，格段とさかんに，いろいろな大学，研究機関に所属する研究者が，種々な研究課題をもって，千演を訪れ，協力を求めるようになる。その状況は『千葉演習林を利用して行われた試験研究目録（１８９４年～１９８７年)』での，この時期からの発表数の急増，発表者の所属，発表内容の広がりに明らかである。

１９７０年代に入り，研究面での演習林の役割に新しい時代が始まり，技術研修活動に影響したといえよう。

引用文献

1）蒲谷　肇 (1977):編集後記，清澄（房総の自然研究会）**6**:76

2）久木田賢志 (1952):東大清澄演習林見學旅行記，優良林業地視察團第一班 (ロ)組，山林 **823**:60-61

3）根岸賢一郎・鈴木　誠・斯波義宏(1991): 千葉演習林沿革史資料(3)，東京大学農学部林学科学生の造林学現地実習の変遷，演習林 **28**:13-57

4）佐藤　修(1995): 千葉演の思い出，演習林 **33**:57-103

5）扇田正二(1953): 東大千葉縣演習林「行幸記」，山林 **830**:1-3

6）芝本武夫(1995): 演習林の思い出，演習林 **33**:105-112

7）千葉県農林部林務課 (1979):千葉県林政のあゆみ，680p.,千葉

8）山根明臣 (1991):ていねい植え－あの山はどうなった５－，林業技術 **591**:18-21

9）Anon.(1922):大日本山林會第三十二回大會記事，山林 **478**:23-25（千演関連部分）

10）Anon.(1933):本會第一回見學旅行記（東大農學部千葉縣演習林)，木炭協會報 **7**:346-349

11）Anon.(1955):演習林の近況，演習林 **10**:96-98（関連記事）

Ⅲ－５　外国樹種見本林入口の石碑由来

いわゆる清澄道には，麓から頂上までに６体の地蔵尊があり，３体目は現在の県道天津小湊・市原線の七曲外国樹種見本林入口付近に位置し[1]，また付近には大日如来，馬頭観音もある[4]。見本林への歩道へ入ると，左側は小高い丘になっていて，大小二つの石碑が立っている。

（１）小さい碑：『三輪治三郎君碑』

１８９８／Ｍ３１年１１月，翌年６月の卒業を前に病死した林学本科学生三輪治三郎を記念したものである。

三輪は，１８７２／Ｍ５年日向国臼杵郡細島町の生れで，１８９０年鹿児島高等中学造士館（のちの七高）入学，１８９６年同校大学予科第二部卒，帝国大学農科大学林学科入学。碧水または米峰生と号し，林政学専攻の弁論家であったが，盲腸炎のため１８９８年１１月２１日，東京赤十字病院で死去。同級生，渡邊音吉の『嗚呼林學生三輪治三郎君逝く』の追悼文が残る[5]。同クラスは，三輪，渡邊のほか，堀田正逸，

吉田義孝の４名の小人数で，上のクラスには諸戸北郎，下のクラスには寺崎　渡の名前が見られる。

林学も揺籃期にあり，前途有為な学生の死は，ひとしお惜しまれる時代であった。追悼の紀念事業会がつくられ，募金額は127 円余に達した。うち，36円36銭で石碑製作，18円で清澄へ運搬，９円85銭で建立，残余は農科大学図書館への図書寄贈と雑費にあてた[6]。石碑建立に，この地が選ばれたのは，当時の農科大学教職員，学生，生徒の千葉演習林に寄せる思いを物語る。ようやく清澄に派出所が置かれる前後で，現地実習をつうじ学生，生徒が演習林づくりに励んだ時期である。おそらく本科２年の造林学現地実習に，三輪は１８９７／Ｍ３０年春に参加したはずであるが，本多静六助教授指導の学生，生徒による植樹造林が，ようやく成功した年にあたる[2]。碑の位置は，当時の造林の中心であった南沢スギ人工林や見本林に接している。

１９６８／Ｓ４３年８月，宮崎県日向市細島在住の，治三郎氏甥，三輪賢一郎氏ほか縁故者３名の来訪が，清澄寄宿舎の芳名録に記帳されている。

（２）大きい碑：『松野先生記念碑』

東京山林学校の創設に尽力，わが国の林学教育の祖といわれる松野　磯(ﾊｻﾞﾏ) の功績を記念する[3]。死去翌々年の１９１０／Ｍ４３年建立された。『山林』誌[7]に掲載されている当時の写真は，千演で撮影したもので，現在にくらべ周囲の樹木が小さく開けた感じである[CM43/05/20,HM44/01/26[H85],02/28[C266]]。

碑の裏には，ときの演習林長，川瀬善太郎撰の以下の文章がある（原文は縦書き，文節を適宜あけた)。

先生諱磯松野氏山口縣人　明治三年従北白川宮能久親王之獨逸國留五年專修林學業成而歸　爾來當林業教育之要路　敍正五位勳四等　常孜々教養後進林學之基礎頼以功績尤著　今世志斯學者莫不受先生之薫陶可謂我邦林學自先生始也　普魯西國王贈王冠勳三等索遜和維麻大公贈白鷲勳三等　亦賞其功也　四十一年五月十四日病卒距其生弘化四年三月七日享年六十二　門下生追慕先生徳業汎謀于同志捐貲得　安房清澄地若干經營　而為松野記念林　欲傳先生功績於不朽　乃建碑表之

松野は，東京山林学校→東京農林学校→農科大学の教授をつとめたが，１８９３／Ｍ２６年に大学から東京大林区署へ移った。千葉演習林創設の前年で，その後松野が千演を訪れたとの記録は見当たらない。

松野の業績の第一は，東京山林学校の創設にある。記念碑建立の場所として，西ヶ原の東京山林学校跡や，移転して農学校と合併，東京農林学校から農科大学へと昇格する駒場なども検討されたと思われる。それが千演になったのは，年々歳々，実地演習に訪れる林学学徒の目にふれる機会の多いこの地が，林学教育を興した松野の記念碑に，ふさわしいと考えられたからであろう。大正年代から昭和年代前半期の造林学現地実習では，外国樹種見本林見学のさいに，記念碑についての説明があった[2)]。

引用文献

1) 長谷川　茂(1984): 清澄道に沿って－歴史と自然と－，千葉県の歴史 **27**:41-51
2) 根岸賢一郎・鈴木　誠・斯波義宏(1991): 千葉演習林沿革史資料(3)，東京大学農学部林学科学生の造林学現地実習の変遷，演習林 **28**:13-57
3) 田中波慈女(1962): 松野　磵先生, In:林業先人伝（日林協編），p.1-33
4) 千葉県教育委員会(1990): 伊南房州通往還Ⅱ，千葉県歴史の道調査報告書 **12**, 87p.（清澄道:p.32-38）
5) 渡邊音吉(1898): 嗚呼林學生三輪治三郎君逝く，山林 **192**:67-68
6) Anon.(1900):故三輪治三郎君紀念事業決算報告，山林 **210**:47
7) Anon.(1910):故松野　磵先生記念碑に就て，山林 **339**:26+写真２葉と広告

Ⅳ　保護・管理

演習林の日常的な管理の多くは経営案にしたがって進められ，特別なこと以外は，往復文書綴に記録が残ることは少ない。特別な場合のひとつとして，いろいろな原因による森林の被害，すなわち森林保護にかかわる事項がある。

ここでは，主として気象要因による被害を【Ⅳ－１　千葉演習林の自然災害】に，森林火災を【Ⅳ－２　千葉演習林の山火事】に，入猟者から試験地を保護する目的で清澄地域に設けられた禁猟区と，増えすぎた野獣による被害の軽減をはかる除害狩猟を【Ⅳ－３　清澄の禁猟と狩猟】にまとめた。

すでに【Ⅰ－４　１９００／０１年の運営方針】でふれたように，初期の演習林では，民有地との境界確定が重要な仕事のひとつであり，確定した境界は保全に関心が払われた。多くの部分で多少の紆余曲折はあったが，関係者による境界査定は順調に進行した。しかし，池ノ沢・小屋ノ沢官林と西原民林の境界のように，裁判に持ち込まれる係争もあった。１９００年～１９０２年の『池ノ沢事件』である[CM33/01/09,34/02/06,35/06/17]。１９０４年には，同池の沢で立木下げ戻し問題が起きた[CM37/09/11,12/27]。１９１８年

には，瀧ノ沢の立木公売が，下げ戻し問題係争中との理由で数ヶ月間延期された。多くの係争は比較的短期間に決着したが，１８９９年清澄寺申請の下げ戻し問題が解決したのは１９３９／４０年のことである（五十周年概要および ESS ）。以上の諸係争につき，往復文書綴には断片的な資料しかファイルされていない。『池ノ沢訴訟関係書類』（Ｔ４年主任交替引き継ぎ覚書），『清澄寺下戻ノ件書類，昭和十四年五月』CS48/07/18などとして，多くの資料が別個にまとめられていたようであるが，現物は見当たらない。

ここでは，【Ⅳ－４　保護嘱託巡査ほか】として，大正から昭和年代敗戦後までの期間，地元警察に『境界保護』などを依頼した経緯を記述し，あわせて『森林犯罪』，『労働災害』につき，かんたんにふれた。

森林のレクリエーション利用は，現在では当たり前となったが，千葉演習林では明治末の『野獣園』の開設に始まる長い歴史がある。大正年代には『森林公園』の，昭和年代初期には『清澄山縣立公園』に対応した計画が考えられた。それらにつき【Ⅳ－５　公園・レクリエーション利用】で記述した。

なお，そのほかの特別な事項として，【Ⅳ－６　可燃性天然ガス試掘権】をまとめた。

施業の中心である『植伐』については取り上げない。往復文書綴を通覧して造林関係で目につくのは，初期の造林に，駒場の林学苗圃などで養成した苗を植栽したことである。

また木材の伐採関係では，明治時代，本学への建築材供給がしばしば行われた。すなわち，本学学生集会所増築CM40/12/12，法文科大学学生控室新築CM41/05/10，三崎臨海実験所増築 HM41/07/08,CM41/10/14，本学動物学教室増築CM41/08/20，演習林本部付属官舎・本学教室修繕CM41/09/27，本学植物学教室増築CM42/03/11ほか，同教官会議所新築CM44/05/27ほかなどへの供給である。

大正年代には，陸軍築城本部をつうじ東京湾要塞へ電柱材を納入したCT6/03/03ほか。関東大地震のさいには，大学の応急工事にあてるため木材処分の停止指令があり，杉間伐材，杉皮などを用意したが，運搬に問題があり，結局，上記築城本部へ納入したCT12/09/08ほか。

昭和年代初期の不況時には，陸軍工兵学校や陸軍造兵廠へ，モミ材の売り込みを図ったCS5/12/24が，つづく太平洋戦争中には，軍需用材の供出がさかんに行われた。